

こおり もと  
市原市郡本遺跡群 (第12次)

2010

小 倉 好 武  
市原市教育委員会

## 序 文

千葉県市原市は古代上総国の中心地であり、上総国府が所在しておりました。

そして、郡本遺跡群は戦後間もない昭和23年に千葉県教育委員会が行った「千葉県史跡名勝天然記念物調査報告書」において、上総国府推定地として有力視され、古代の市原郡衙（郡役所）推定地としても考えられています。

現在、郡本遺跡群のある郡本地区は、市街化地区であることから、近年は住宅建築などの開発にともなう小規模ながら調査が実施されておりますが、小規模発掘調査では、国府、郡衙跡地などの特定が難しいのが実情であります。

今回の第12次調査では、中世時期の郡本地区について、新しい知見が得られました。この報告書が古代から中世にわたる上総国府及び国衙推定地の郡本地区の歴史を未来に残し伝えゆく一助になればと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまでご協力いただきました小倉好武氏、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に、心より御礼申し上げます。

平成22年3月

市原市教育委員会  
教育長 山崎 正夫

# 例 言

- 1 本書は千葉県教育委員会の指導のもと、小倉好武氏のご協力により、調査を委託された市原市教育委員会が主体となり実施した、千葉県市原市郡本2丁目389・396番に所在する「郡本遺跡群第12次」本調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書刊行は、市原市教育委員会ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターが実施し、調査コード番号はセ449とし遺物注記番号も同番号を使用した。
- 3 本調査、本書の編集・執筆は、近藤 敏が担当し、中世遺物の分類は櫻井敦史が行った。  
発掘調査 平成21年5月11日～平成21年5月29日  
整理作業 平成21年6月1日～平成21年8月31日
- 4 調査前に基準点測量を行い、関東第Ⅸ系平面直角座標を既知点から移設して、日本測地座標点を現地測量した。測量値はTKY2JGD Ver.1.3.79による変換結果として、世界測地系座標を記載した。水準点測量は、直近の千葉県精密水準点を与点とし平成20年の成果を使用した。
- 5 出土遺物及び調査資料のすべては、市原市埋蔵文化財調査センターが保管している。

## 本文目次

第1章 調査の経緯と概要	第1節 遺跡の立地と環境	9
第1節 調査の経緯	第2節 遺構説明と遺物出土状態	9
第2節 遺跡群の位置と周辺遺跡	第3章 まとめ	
第3節 遺跡群の立地と歴史環境	小結	23
第4節 郡本遺跡群の調査	註及び引用参考文献	24
第2章 郡本遺跡群第12次調査成果	報告書抄録	

## 表 目 次

第1表 郡本遺跡群調査一覧	②土師器・須恵器等③瓦等④石材鉄滓	27・28
第2表 遺物観察表・①中世陶磁器		
第3表 遺物総量一覧 ①・②・③		28

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1/50,000)	第9図 1号遺構出土遺物実測図(2)	15
第2図 郡本周辺図と小字名図 (1/20,000)	第10図 1号遺構出土遺物実測図(3)	16
第3図 郡本遺跡群周辺地形図 (1/6,000)	第11図 2号遺構平・断面図 (1/80)	17
第4図 調査区全体図と座標 (1/200)	第12図 2号遺構遺物出土地点	18
第5図 1号・3号・4号平面図 (1/80)	第13図 2号遺構出土遺物実測図(1)	19
第6図 1号・3号・4号遺物出土地点	第14図 2号遺構出土遺物実測図(2)	20
第7図 1号・3号断面図エレベーション図	第15図 2号遺構出土遺物実測図(3)	21
第8図 1号遺構出土遺物実測図(1)		

## 図 版 目 次

図版1 郡本遺跡群現況空中写真	図版5 3・4号遺構写真
図版2 市原台地北部空中写真	図版6 2号遺構写真
図版3 郡本遺跡群周辺空中写真	図版7～10 1・2号出土遺物(1)(2)(3)(4)
図版4 1・3・4号全体写真	図版11～13 2号出土遺物(1)(2)(3)

# 第1章 調査の経緯と概要

## 第1節 調査の経緯

発掘調査は、市原市郡本2丁目389番地及び396番地について、集合住宅建設に先立って実施された。平成20年12月2日付け教文第14号666により、千葉県教育委員会教育長から「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」が、施工者へ通知された。今回の本調査に先立ち、平成20年度に国庫及び県費補助を受けて、確認調査を市原市教育委員会が主体となって郡本遺跡群第11次調査として、市原市内遺跡発掘調査の実施している（牧野2009）。

確認調査の結果、中世後半期戦国時代の台地整形を伴う集団墓と井戸遺構、土坑が検出された。この成果から事前協議の上、建物基礎と浄化槽部分の深度が深い工事部分の153㎡についてのみ本調査を実施することとした。そのため埋蔵文化財発掘調査委託契約を委託者である小倉好武と、受託者市原市教育委員会が締結した。本調査は平成21年5月11日から5月29日まで、延べ13日行われ、その前後と途中で重機による表土除去と埋め戻し作業が5日間ほど要した。

## 第2節 遺跡群の位置と周辺遺跡（第1図参照）

第1図は本調査遺跡周辺の同時期及び、関連する主な遺跡の位置図である。北から説明すると、千葉市と市原市の行政境界が、旧茂原街道部分の直線道路であり、①の▲の列で位置を示している。図ではこの列の途切れる場所に館山道があり、その一部を調査したところ溝を検出した。上総と下総の国境であり、市原条里の起点として地割が施工された可能性を、指摘している（大谷1993・2005）。

②は菊間手永遺跡であり、台地上の中世後半の墓域が人骨を伴って検出されている（近藤1987・小出1997）。③は菊間廃寺跡であり、菊間古墳群首長国造の氏寺と考えられる（須田b1998）。本格的調査は行われていないが、瓦基壇の存在が予測されており、上総国分寺と同範の軒丸瓦が出土している。④は八幡御墓堂遺跡として調査され、中世時期の八幡市街の形成を初めて確認した（櫻井2005）。⑤は白船城跡（高橋1987）であり、長軸約500m、短軸300mの独立台地に3条の溝で分割された連郭式の城郭形式をとり、城郭以前は15世紀の墓域が検出されている（櫻井1997）。⑥の海岸平野は、市原条里制遺跡として館山道によって調査された（小久貫1999）。●の列点は古代道路であり、条里に先行して造成され、海岸線まで直進していると推定される（田所1998d）。低地の道路跡は、門前地区で台地上に上がり、郡本地区を抜けて再び藤井地区から、地割やくぼみとなって地表に確認できる状態となり、さらに山田橋地区方向に南下することになる（浅利2003）。

⑦は市原城跡であり、城郭としては不明な点が多いが（田中2000）、調査によって埋葬されたヒトの頭骨が大量に検出された（加藤2006）。⑧は光善寺廃寺であり、凸面に布目痕を有する平瓦が出土し、位置や出土瓦から市原郡の郡名寺院と推測されている（須田a1998）。⑨は当報告である郡本遺跡群第12次調査地点である。郡本遺跡群については、後に詳述する。

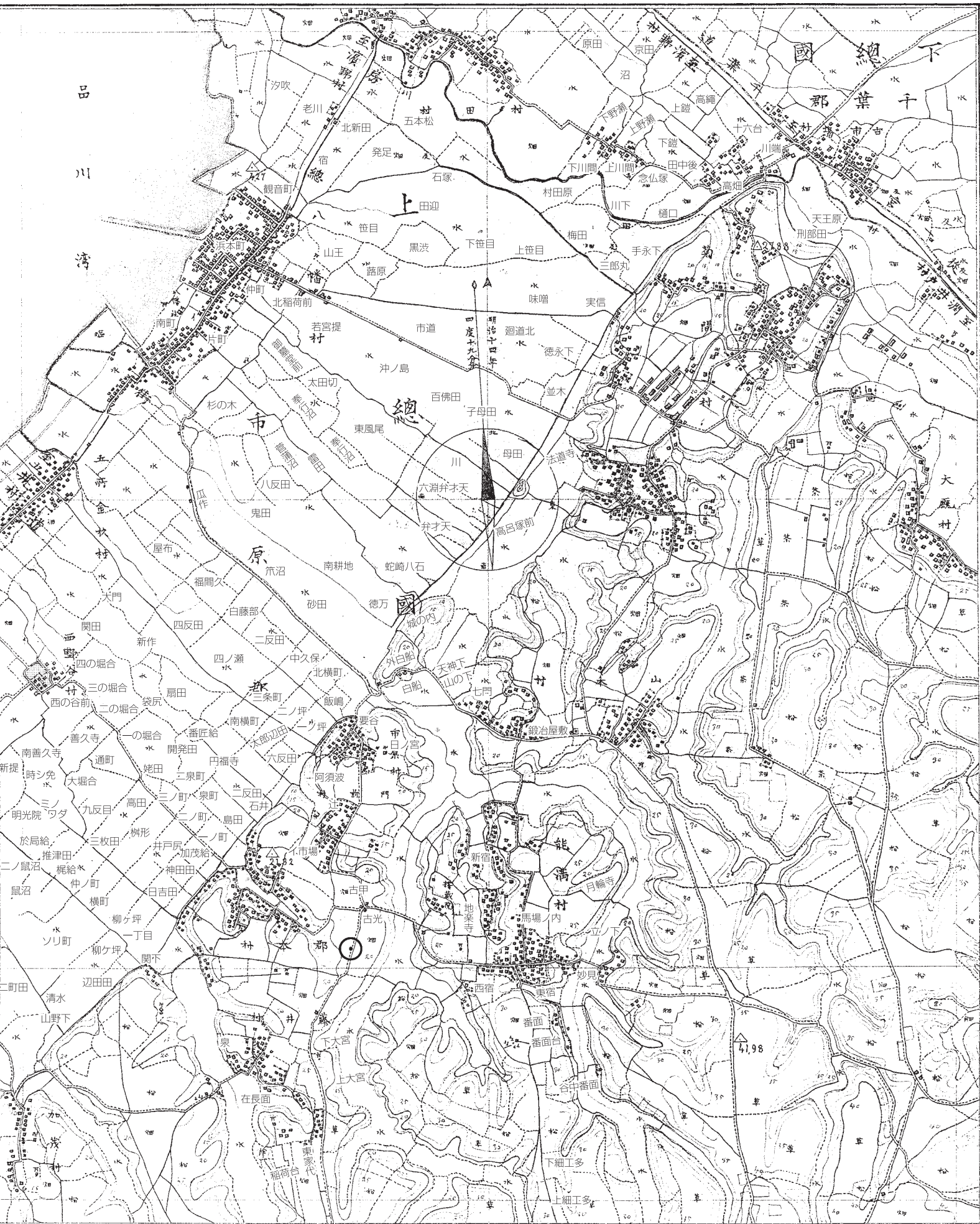
⑩は、能満遺跡群中の中世前半時期と推測される馬場ノ内館跡（小高2003）であり、その北西300mには、16世紀と推定される能満城跡が存在する（小高1999）。⑪は南大広遺跡であり、「寺」





第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 50,000)





第2図 郡本周辺地形図と小字名(1:20,000)千葉県上総国市原郡八幡村及び菊間村迅速測原図(国土地理院)

の墨書土器、鎮壇遺構、製鉄遺構から、9世紀頃の「村落内寺院」ではないかと推測されている。

⑫は稲荷台遺跡であり、南北方向の古代道の西側に隣接しており、上総国府の関連諸機関として官衙的色彩の強い遺跡である（浅利2003）。⑬は稲荷台遺跡から東へ300mの谷を挟んだ台地上に位置する千草山廃寺である（田中2003）。⑭は、能満上細工多遺跡であり、古代と推定される東西方向の溝が台地を南北に縦断する形で検出された（宮本1999a）。

⑮は、国分寺台遺跡群でも海岸平野に面する台地上に位置する加茂地区の台遺跡である。中世の13世紀から16世紀まで続く集団墓域である（半田1998）。⑯は、現養老川に近く地名として「コウズ」国府津（国府港）と推定される五井字「光海津」の位置である（宮本1996）。⑰は上総国分僧寺の位置（須田c1998・櫻井2009）、⑱は市原市役所を挟み、北東700m方向にある上総国分尼寺（宮本1986）である。両遺跡とも国史跡に指定され、現在整備が進められている。

⑲は・の列点部分に、約幅員6mの古代道路が連絡している。山田橋表通、大山台遺跡の調査から、道路は分岐して、さらに幅員4mと2mの道路遺構が能満地区に連絡している（蜂屋ほか1999・大村2004）。⑳は西広貝塚遺跡であり、現西広神社周辺にあったが、調査後湮滅している。中世時期に屋敷跡があり現西広集落の初現と考えられる（櫻井2005）。㉑は、孟地遺跡で現在は山倉ダムの灌水面に没している。8世紀の瓦塔、瓦堂が出土しており、祭祀遺跡の可能性が高い（田所e1998）。

㉒は西野遺跡であり、古代海上郡衙推定地となっている（渡邊1998）。また近年周辺を圃場整備で調査がなされ、古代遺構が西野地区全域に広がっていることが確認された（小川2005）。㉓は今富廃寺跡であり、周辺調査のみで詳細は不明である（渡邊1998）。㉔は島野地区の式内社島穴神社の隣接地区の島穴の駅家推定地である（谷島1994）。㉕の新堀小鳥向遺跡では「上総国新堀郷給主得分注文」（1338年建武5年）の史料を裏付ける鑄造遺跡の検出があり、中世遺跡と文献との歴史的検討が可能になってきている（櫻井2002）。㉖は「里長」の墨書出土で著名な磯ヶ谷門脇遺跡である（小林1985）。そこから西方向400mには松崎中里遺跡があり、奈良時代前後の大形の掘立柱建物跡が検出されている。㉗は扇状地にある山田遺跡群（小川2009）で、500mほど上流の中里遺跡からの流入遺物として、風字硯や円面硯や奈良平安時代の多量の遺物を検出し、中里遺跡の特異性を想定している。㉘は二日市場廃寺跡で創建瓦が雷文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦（紀寺式）で著名である（郷掘1998）。

以上①～㉘まで紹介したが、上総国府周辺地域という特殊性があり、近年の調査例の増加や、資料の公開も進んでいる。郡本遺跡群周辺では、古代から中世時期にかけて文献史料と考古資料の協業で大きな成果を期待することができる地域となった。

### 第3節 遺跡群の立地と歴史環境（第2図参照）

郡本の範囲は、現在の郡本地区より広い地域名称であったと推測され、鎌倉時代にさかのぼる中世郷名であり、少なくとも近世初頭までは「根田・藤井・門前・西野谷村」の範囲が郡本村であったとされている（宮本b1999）。第2図は明治初年の迅速測図の原図（註1）で、市原郡の八幡村及び菊間村の一部を下図として、海岸平野に広がる市原条里制遺構の範囲と、郡本村、能満村地区に関連小字名を書き加えている。第1図の右上半分部分に当たり、現況と比較して海岸部



の変貌と西野谷村が市街化区画整理の施行で旧状を留めていない。今回の調査地点は、○・印の点部分となり、現在の国道297号線の八幡村から勝浦に向かう旧街道沿いとなる。条里区画は前述の近世初頭時期の郡本村の範囲が明確に遺存しており、条里地割名、給田（鍛冶、土器師、番匠）等の遺名も数多く残っている（笹生d1998）。また、第3図㉔の市原条里制遺跡郡本地区での標準土層では、Ⅱ-1層は15世紀～17世紀、第Ⅱ-2層は12世紀～14世紀、第Ⅱ-3層は9世紀後半～11世紀と時代を反映した土壌の堆積が見られる。近世の房総往還沿いの五所金杉村から西野谷村の海岸平野を抜けて、台地上の郡本村から能満村に抜けるルートは、現在の県道五井本納線であり主要道路経路として、江戸時代以前から機能していたことが理解できる。

第3図郡本遺跡群周辺地形図は、昭和30年代後半の地形図に郡本遺跡群、能満遺跡群と、市原条里制遺跡郡本地区及び関連遺跡全40個所の調査範囲を記載したものである。古代から中世に係る遺構は、県道五井本納線工事伴って調査された溝状遺構である。

第2図（現五井本納線下）・第3図に示される郡本神社参道に平行する北側の道路沿いに、断面逆台形の直線200m以上の溝状遺構が検出されている。小皿状の土師器が検出されており、11世紀時期の区画溝としている（相京・伊藤2004）。郡本遺跡群古甲地区では、南北方向の同時代の溝状遺構検出されており、小皿状の土師器が検出されるなど関連性に興味を持たれる（田所d1998）。

国府形態については、整然とした古代時期国府の形態から、変貌したと推測されている（小川2001）。中世以降の国衙機構とされる「所」の成立から、在庁の運営する国の役所が、国衙または国庁と呼ばれるようになったとしている。現在、遺跡遺構で残される中世前期14世紀以前の国衙と推定されるのは、第3図㉔の能満遺跡群馬場ノ内館跡である（小高2003）。第2図に示す通り、寺名、タチ（館）、宿等の小字名が遺存している。第3図網点部分は掘割の推定ラインを示した南北約2町、東西1町四方の規模があり、西辺は高さ2～3mの土塁が遺存し、図版1でも北辺部から東辺は幅6～8mの堀状の凹地が観察できる（近藤2003・a2004）。14世紀以後は㉔に区画溝が東西に方向に数条掘削され、2×1町の大規模区画溝を破壊しているため、新たな区画が必要な施設が造営されたのであろう。その後西斜面部は台地整形がなされて墓域になっている（近藤b2004）。㉔は半町四方の区画溝があり、15世紀と推定される数棟の掘立柱建物跡がある。その区画は16世紀以降も維持されて、江戸以降は溝で小区画されており、現状の地番と合致する。能満遺跡群は古代の遺構遺物は非常に少なく、中世の遺構が多いのが特徴である。現在でも㉔には、14世紀末頃創建された県指定府中日吉神社本殿があり、㉔の戦国時代末の能満城跡が存在し、釈蔵院関連文書からも「郷城」と推定されている（佐藤2004）。

#### 第4節 郡本遺跡群の調査（第3図および第1表参照）

郡本遺跡群は郡本、藤井、門前地区に広がる第3図の台地部分に広がっている。東は新田川左岸で、能満地区と台地が分離され、西側と南側は白幡川右岸と開析谷によって分離される。北側は海岸平野と市原地区につながっている。第3図郡本遺跡群周辺地形図㉔番及び、第1表郡本遺跡群調査一覧挿図番号11の第11次調査確認調査が、今回報告の第12次本調査地区である。郡本遺跡群隣接の調査は昭和23年調査の「市原遺跡発掘調査概報」千葉県教育委員会調査が敲矢であり、その他の調査成果は国分寺台遺跡群の調査の発端にもなった（瀧口ほか1949）。





第3図 大能満遺跡群周辺地形図(昭和39年頃) (1:6,000)

第1表 郡本遺跡群調査一覧（出典は引用文献番号と同一）

挿図番号	遺跡名・調査地点	出典	概要
1	市原市郡本遺跡（第1次）	5	昭和61年度調査弥生時代後期竪穴住居跡3軒、奈良平安時代竪穴住居跡5軒。
2	市原市郡本遺跡（第2次）	19	平成6年度調査、弥生時代後期竪穴住居9軒、奈良平安時代竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡2棟。
3	市原市郡本遺跡（第3次）	26	平成9年度調査、古墳時代後期平安時代の竪穴住居跡各1軒、溝状遺構とピット多数。
4	市原市郡本遺跡（第4次）	26・40	弥生時代後期竪穴住居跡7軒、奈良平安時代竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟、墨書土器出土。
5	市原市郡本遺跡（第5次）	42	弥生時代中期～後期竪穴住居跡3軒、奈良平安時代竪穴住居跡3軒、東西の溝状遺構。
6	市原市郡本遺跡（第6次）	75	平成16年度調査、平安時代貝ブロック1、地山ハードローム露出。
7	市原市郡本遺跡（第7次）	53	平成19年度調査、竪穴住居跡弥生時代後期1、古墳時代前期1、後期1、平安時代2軒。
8	市原市郡本遺跡群（第8次）	85	平成20年度調査、奈良平安時代竪穴住居跡1軒、中世の土坑1基。
9	市原市郡本遺跡群（第9次）	—	19年度不特定遺跡調査奈良平安時代竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟。
10	市原市郡本遺跡群（第10次）	85	弥生時代後期竪穴住居跡1軒、中世掘立柱建物跡1、五輪塔出土の土坑を検出。
11	市原市郡本遺跡群（第11次）	85	当遺跡確認調査本調査範囲外に、大溝？と貝ブロックを含む中世の土坑がある。
12	郡本遺跡群（市原郡衙推定地）	61	郡本地区公民館下弥生時代住居跡1軒、奈良平安時代住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟検出。
13A・B・C・D・E・F・G・H・I	市原市郡本遺跡（千葉県文化財センター）	72	A区遺構なし、B区奈良平安時代の溝状遺構2条東西南北方向、C区溝状遺構東西方向11世紀前半、東端部奈良時代後半と弥生時代後期竪穴住居跡各1軒と奈良平安時代の井戸状遺構が検出、D区塚1基、E区公民館前11世紀前半溝状遺構、F区弥生時代後期、奈良平安時代竪穴住居跡各2軒、G区弥生時代後期、奈良平安時代竪穴住居跡各2軒、緑釉陶器皿出土、H区奈良平安時代竪穴住居跡2軒、スラグ、椀形滓出土、I区郡本交差点周辺は削平のため遺構なし。
14A・B	郡本遺跡群（古甲遺跡第1次）	16	平成3年度（A区）昭和39年調査地点確認調査だが、基壇の所在不明のまま終わる。平成3年度（B区）奈良平安時代掘立柱建物跡3棟以上、竪穴住居跡2軒。
15	郡本遺跡群（古甲遺跡第2次）	16	平成4年度、東西方向大溝（上辺8m・下辺4m・深さ2m）の最終段階は、中世後半時期と考えられる。
16	郡本遺跡群（古甲遺跡第3次）	23	平成6年度は、1次Bの西側隣接掘立柱建物跡3棟・竪穴住居跡2軒検出した。
17	郡本遺跡群（古甲遺跡第4次）	24	平成7年度竪穴住居跡は、弥生時代後期2軒、奈良時代2軒、平安時代1軒、3間×4間の掘立柱建物跡。
18A・B・C・D・E	郡本遺跡群（古甲遺跡第5次）	50	平成8年度A区、8世紀中葉から9世紀の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、B区、竪穴住居、掘立柱建物跡 C区、弥生後期竪穴住居、D区、奈良時代中葉からの竪穴住居跡2軒、その後の掘立柱建物跡3棟以上、焼土層の整地面、E区、奈良時代後期竪穴住居跡1軒検出している。
19	郡本遺跡群（古甲遺跡第6次）	70	弥生時代竪穴住居跡7軒、奈良平安時代竪穴住居跡2軒、8世紀初頭の畿内系土師器が出土。
20	郡本遺跡群（門前地区）公園	68	姥神社と市原条の大水境界の延長線上にあり、確認調査で平安時代竪穴住居跡5軒等検出。
21	藤井地区字長ノ代（庁ノ台）	45	「中世まで存続した可能性のある国衙国にちなむ地名と考えたほうが自然ではなからうか。」
22	神主院跡（柳橋執事）	46	国府に関係のある守公神を想起する「守公山楊柳寺神主院」郡本八幡宮の別当寺である。
23	大宮大権院跡（別当神主院）	45	現在の郡本八幡神社の境内に石祠がある。古代道跡はこの付近で不明確となる。
24	若宮（別当神主院）	46	神主院跡の東側に隣接する。
25	社官屋敷跡（字井隅・泉＝イスマ）	46	トーン部分は字「イスマ」範囲だが台地斜面部分であり、屋敷地としては立地が悪い。
26	能満府中日吉神社	6	現在の本殿は14世紀末から15世紀の建築と推定されている。
27	能満城跡遺跡（12年度）	63	平成11年度に確認調査を行い調査区から1町×2町区画の西辺南部の溝を検出した。
28	能満城跡遺跡（13年度）	69・71	12年度に引き続き台地斜面の方形区画墓域と五輪塔を伴う塚と東西方向の溝を検出している。
29	能満城跡遺跡（16年度）	80・81	15～16世紀の中世の40m四方の方形屋敷溝、近世の屋敷地を検出した。
30	馬場ノ内館跡	64	狭義の能満城跡を字城山地区（16世紀）として、1町×2町の方形区画を馬場ノ内館跡としている。
31	能満城跡（城山地区）	48・73	市原市指定文化財蔵院文書では、「郷城」と呼ばれているものか？
32	能満遺跡群二階台地点	57	弥生時代後期、古墳時代後期竪穴住居跡5軒を検出。
33	能満遺跡群地楽寺地区	82	古墳時代前期前半の竪穴住居跡を1軒と柱穴群を検出。
34	唐崎台遺跡	2	弥生時代後期の大集落であり、ほぼ現在の市原小学校敷地全域に集落範囲が広がると推定される。
35	▲印郡本四丁目の「おシャク様」	52	郡本四丁目100番地の石造物「シャク・ジ」守公神の語幹に近い。古代役所の内神と関連が推測される。
36	市原八幡神社（元八幡・若宮八幡）	35	大字市原字辻に所在し、柳橋執事に関係している。水田条里地割の台地延長上に位置する。
37	▲印旧道遺跡の石造物（道標）	56	銘文右側面「東ハ茂原道 安永六年」「南ハ丑久道 丁酉十月十八日」「北ハ江戸道 郡本内市市場・・・」
38	市原条里制遺跡（郡本地区）	44	2区Ⅱ1層から道路遺構が検出され調査区内で鉤の手に曲がっており、15～16世紀と推定される。
39	郡本八幡神社御旅所	46	現在の郡本八幡神社の参道の西端部にある。
40	▲印姥神社（門前字市市場）	35	祭神は八衢比子・八衢比売・久那斗の三神を祭る。水田条里地割の台地延長上に位置する。

郡本遺跡群は南北方向に国道297号線が縦断し、東西方向に県道21号五井本納線が横断し、その沿線に開発があり調査が始まっている。第3図挿図番号13の一連の調査は、国道県道の改良工事であり、調査は千葉県文化財センターが実施した。古代以前は弥生時代の集落であり、弥生時代中期から後期まで台地上に広範囲に住居跡が検出されている。古代以降奈良時代の竪穴住居跡は、平安時代に比べて少ない傾向にあり、掘立柱建物跡も規模の大きなものは郡本八幡神社北側第3図中②と④の庁ノ台地区と、⑬ a-b-dの古甲地区にとどまっている。

溝状遺構については箱台形状断面上辺2mの規模があるものが、東西方向に現県道五井本納線南辺にはほぼ並行して検出されている（相京2004）。SD-001として一括した溝状遺構は、カワラケが313片3444.94gで、2番目に多い土師器122片1014.74gの3倍以上の重量を出土している。時期は11世紀前半頃としているが、時期の明確な判定材料になる陶磁器片の出土量は極めて少ない。

同様な形状の溝状遺構SD-2-3が、古甲地区⑬ a-b-dに南北方向に検出されており、掘立柱建物跡より切り合い関係が新しい。出土した土師器の小皿から古代末11世紀と推定している（田所 d 1998）。それとは別に東西方向にSD-3と直行する上辺8m底面4mの断面形状箱台形の溝を検出している（高橋1994）。これら平成4年度調査の大溝は数回の掘り直しを経て、埋没しているが現地地形面上のその存在が反映されている。出土遺物はほとんどなく、近隣の古代遺構の遺物の混入も少ないため、中世遺構と考えられる。溝覆土は1m～1.5mの厚さがあり、全層ほぼ暗褐色のロームブロック、ローム粒を含み、腐食土壌の混入によって若干の濃淡がある覆土の様相である。それらは市原市通有の中世でも後半期の城館跡掘覆土となる、概ね黄褐色ローム粒が混入する灰褐色土の15世紀遺構覆土土壌と同様である。

今回調査した郡本遺跡群第12次調査は出土遺物から、15世紀以降に埋没した遺構と考えられるが、その覆土は黄褐色ローム粒が多量に混入した暗灰褐色土であった。市原条里制遺跡の調査成果は、ローム粒を多く含むⅡ2層が水田のかさ上げに使用されたローム土を含む土壌として、条里水田標準土層Ⅱ2層を12～14世紀、Ⅱ1層を15～17世紀としており、そこから検出された遺物は、『台地上の上総国衙周辺の屋敷地や光善寺などを含め、水田周辺の屋敷や社寺で使用された什器の様相を反映している（笹生 d 1998）』としている。



## 第2章 郡本遺跡群第12次調査成果

### 第1節 遺跡の立地と環境（第3図及び第4図参照）

郡本遺跡群第12次調査地点は、第3図①の位置に当たり、北東方向の海岸平野からの侵刻谷の谷頭部分標高23m前後の西向きの緩斜面部に位置する。今回の調査地点から南東80mにある第3図13Hの調査地点（相京ほか2004）は、北東方向からの旧郡本本村からの谷の右岸の緩斜面にあたるが、現標高20mの部分下に現標高18m位置に平安時代9世紀から10世紀頃の竪穴住居跡と土坑がある。谷の裾部分は奈良平安時代から現代まで、1～2m以上の土砂の堆積が見られる。

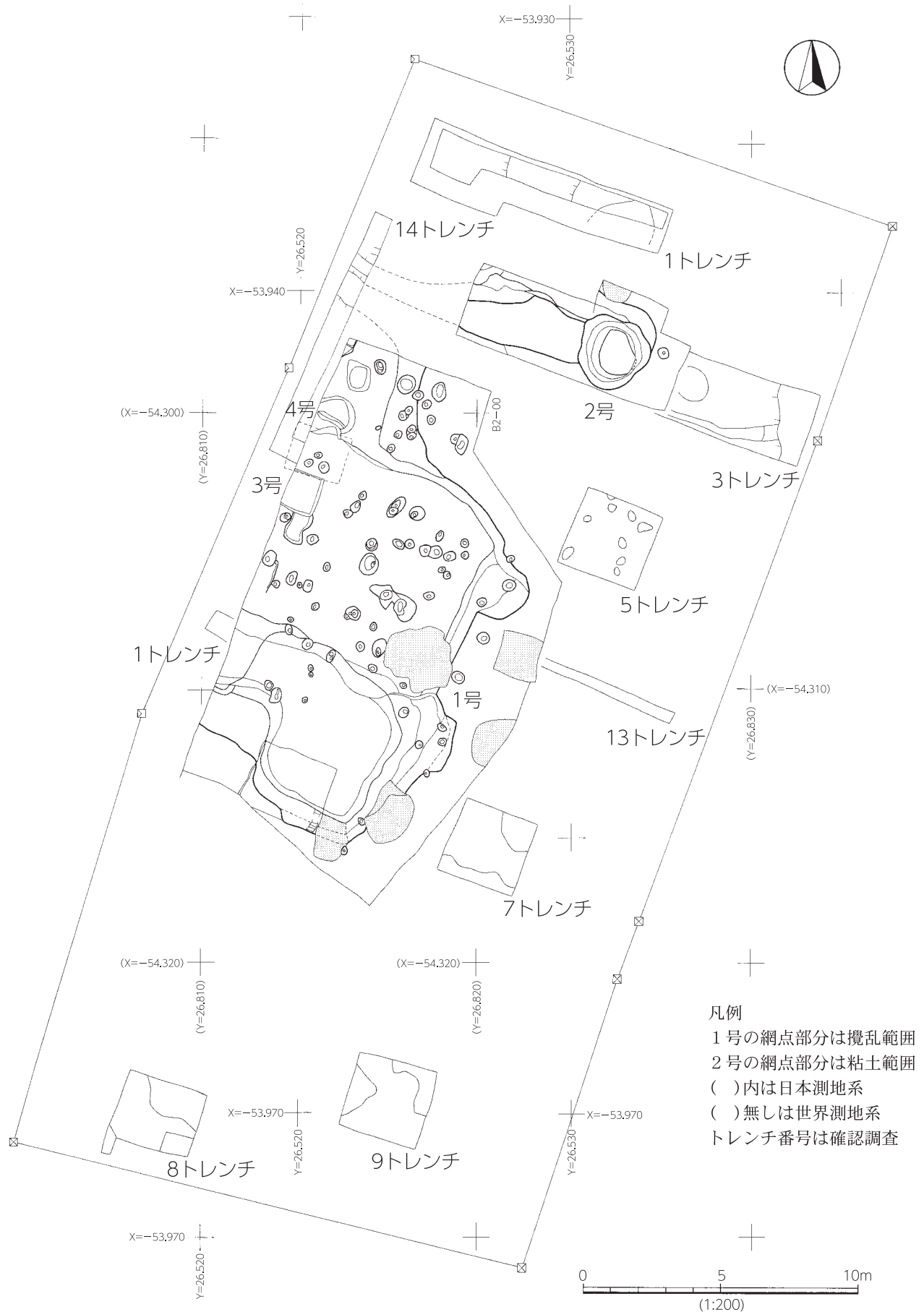
前述したように上総国府及び市原郡衙推定地として、調査が進められてきたが、中世時期に該当する遺構、遺物の検出は極めて少なかった。しかし平成20年度の確認調査の第10次調査（第2図⑩）において、中世の五輪塔石塔部分や当該期の土坑が検出され、第11次確認調査（牧野2009）対象地789.3㎡において、中世遺構の集合が見られた。今回本調査対象は、確認調査成果と工事影響範囲によって、集合住宅基礎部分（1.3.4号遺構）と浄化槽部分（2号遺構）部分に分割してある。そのため、確認調査対象の789.3㎡のうち、部分的な本調査対象地153㎡を、第12次調査とした。第4図は確認調査対象範囲の本調査範囲を示すものである。調査地は北東から南西に傾斜しており、比高差は約50cm、現表土と地山であるローム表面も同様である。しかし表土下には遺構外でもソフトロームがなく、人為削平されたか、自然流失かどちらも不明である。そのためか古代以前の遺物の出土があるが、古代以前遺構の検出は、全くない状況である。第7図の土層説明に示すとおり、表土からローム粒を多く含む、中世後半の特有な土壌である灰褐色土が、全体を覆っている。

調査地区は、西側に海岸平野からの開析谷を開くが、その開析谷は、調査区手前から北方向の大きく湾曲して谷頭となっている。調査区は東側に1～2m高い台地を背にして、南西に向く緩やかな斜面となっている。西側に開くであろう1号遺構の方形区画台地整形があるのはそのためである。

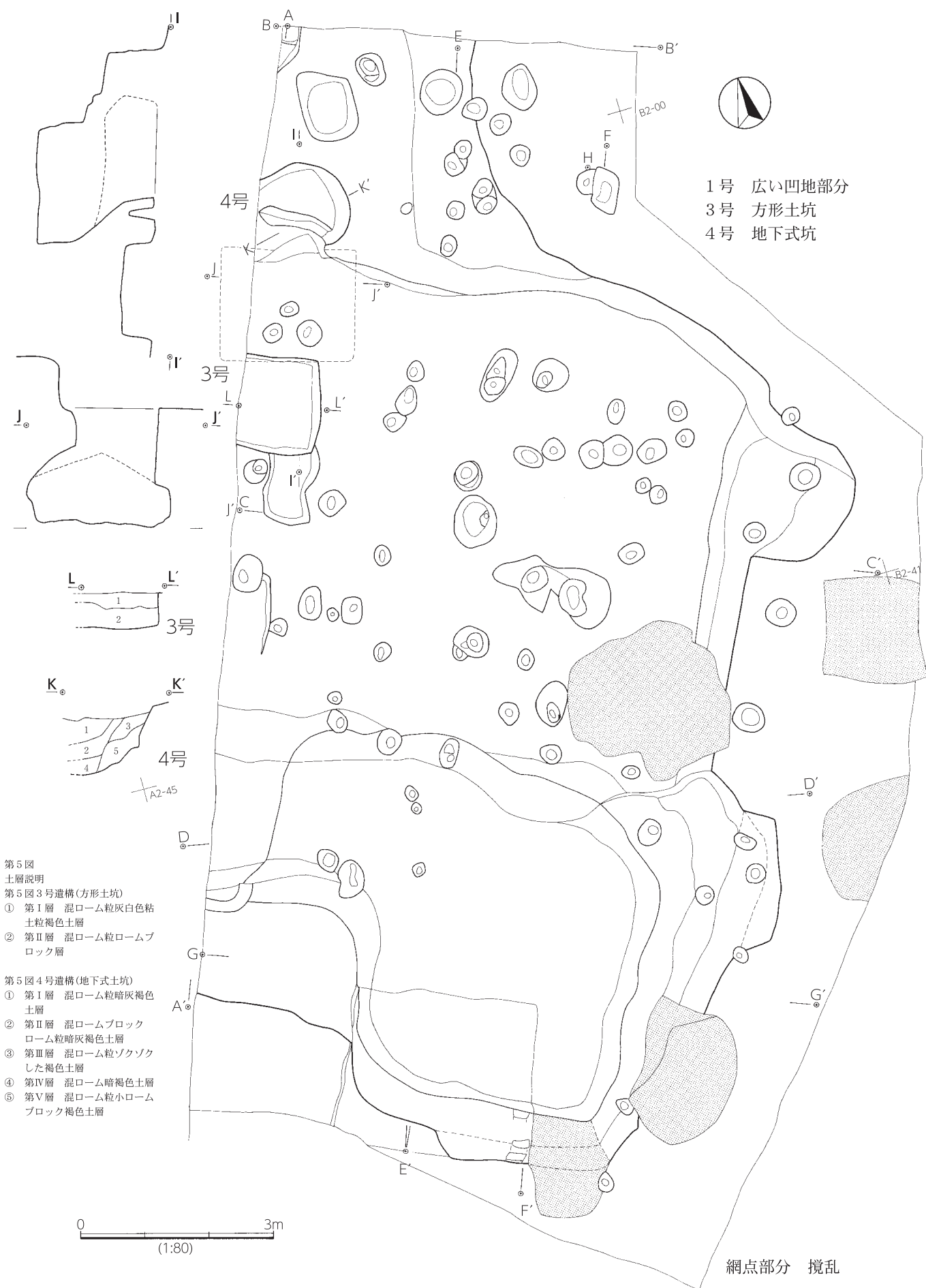
### 第2節 遺構説明と遺物の出土状態

1号遺構は方形区画され、第5図は台地整形部分の全体であるが、南側と北側に二つの区画があり、南側が若干深い掘削をしている。台地整形は東辺の底位置は直線的であり、区画に統一が見られる。北側はやや南より面積大きく、40余のピット状の穴があり、各所に棒状の縦穴痕跡があった。建物柱穴跡ほどの規模や規則性はなく、この個所が墓地と仮定するならば、墓標程度の柱が立っていたと考えられる。出土遺物の中には六道銭と思われる銅銭が4枚と鉄釘が3本検出されている（第9図）。出土遺物では、中世時期の明確な埋納遺物はなく、散漫な状態出土している。

第3号遺構（第5図）は、全掘されていないが、推定1.5m×2mの箱状土坑と考えられ、第7図A～A'断面の観察では、掘削の後、ロームで埋め戻されていることから、墓坑と推測される。埋納遺物の検出はなかったが、状況から中世の方形区画内の墓地を構成する墓の1つであろう。



第4図 調査区全体図と座標 (1:200)

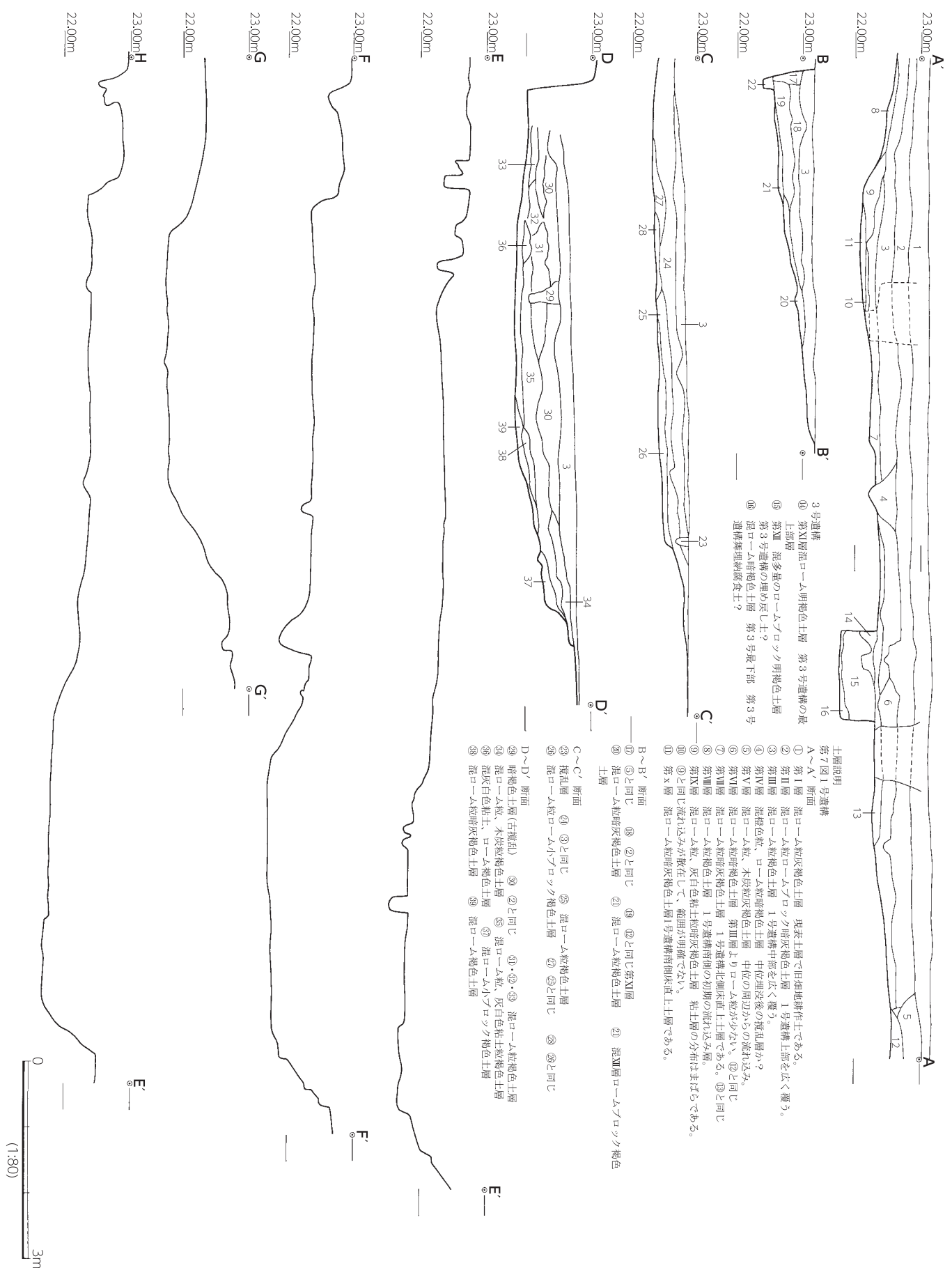


第5図 1号・3号・4号平面図(1:80)





第6図 1号・3号・4号遺物出土地点(1:80)



- 3号遺構  
 ⑩ 第Ⅺ層混ローム明褐色土層 第3号遺構の最上層  
 ⑪ 混多量のロームブロック明褐色土層  
 ⑫ 第3号遺構の埋め戻し? 第3号遺構の埋め戻し? 第3号遺構埋納土層  
 ⑬ 遺構埋納土層 第3号長丁部

土層説明  
 第7図1号遺構  
 A~A' 断面

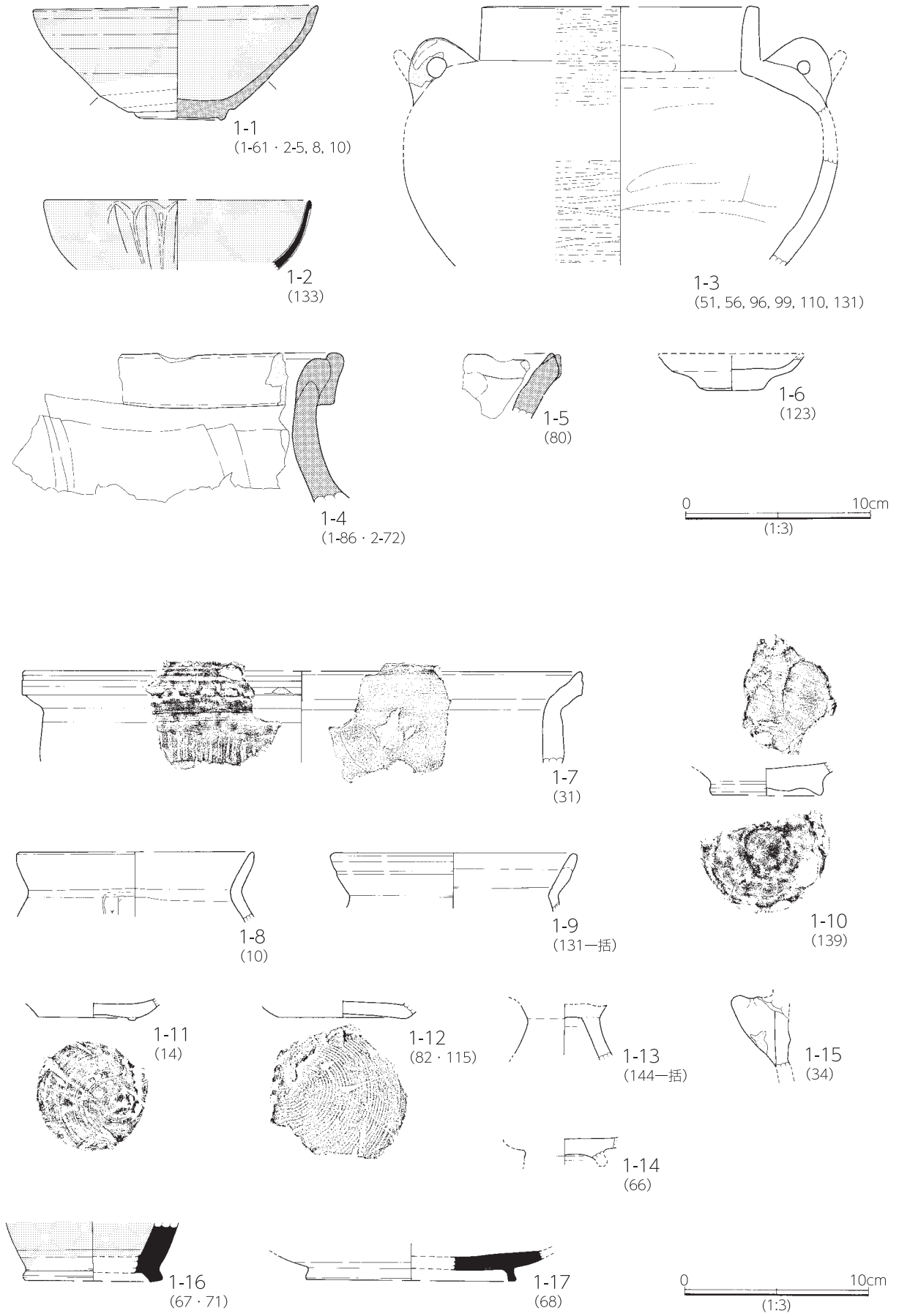
- ① 第Ⅰ層 混ローム粒灰褐色土層 現表土層で旧地脚跡作上である。混ローム粒ロームブロック暗灰褐色土層 1号遺構上部を広く覆う。  
 ② 第Ⅱ層 混ローム粒ローム土層 1号遺構中部を広く覆う。  
 ③ 第Ⅲ層 混ローム粒褐色土層 1号遺構下部を広く覆う。  
 ④ 第Ⅳ層 混褐色粒、ローム粒暗褐色土層 中位の周辺からの流れ込み。  
 ⑤ 第Ⅴ層 混ローム粒、木炭粒暗褐色土層 中位の周辺からの流れ込み。  
 ⑥ 第Ⅵ層 混ローム粒暗褐色土層 1号遺構上りローム粒がみえない。②と同じ  
 ⑦ 第Ⅶ層 混ローム粒暗褐色土層 1号遺構北側床直土層である。②と同じ  
 ⑧ 第Ⅷ層 混ローム粒、灰白色粘土粒暗褐色土層 粘土層の分布はまばらである。②と同じ  
 ⑨ ⑩と同じ流れ込みが散在して、範囲が明確でない。  
 ⑪ 第Ⅸ層 混ローム粒暗灰褐色土層1号遺構南側床直土層である。

- B~B' 断面  
 ⑫と同じ ⑬と同じ ⑭と同じ第Ⅺ層 ⑮ 混Ⅺ層ロームブロック土層 ⑯ 混ローム粒褐色土層 ⑰ 混ローム粒褐色土層

- C~C' 断面  
 ⑱と同じ ⑲ 混ローム粒褐色土層  
 ⑳ 混乱層 ㉑ ⑲と同じ ㉒ ⑲と同じ

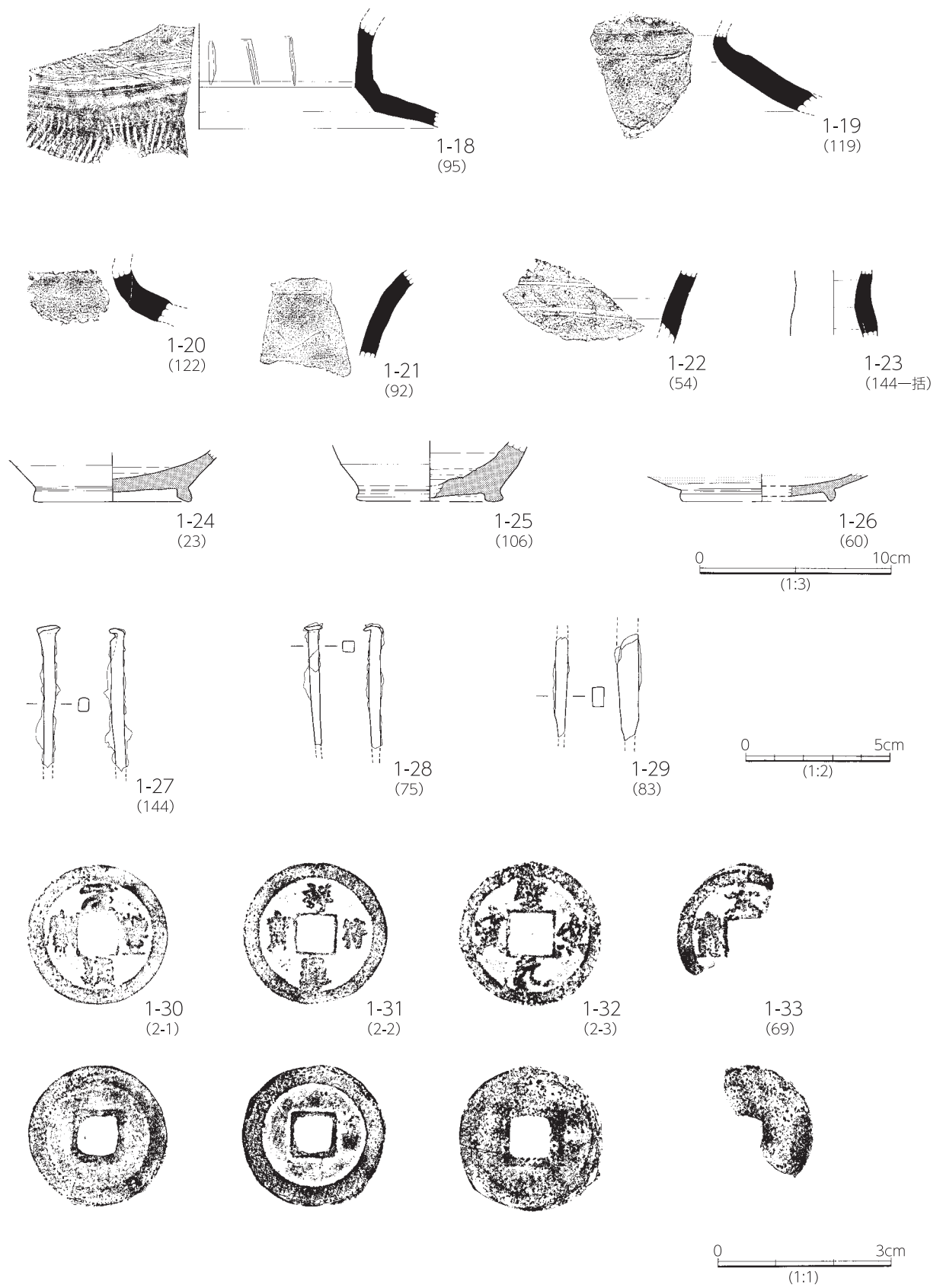
- D~D' 断面  
 ㉓ 暗褐色土層(土層) ㉔ ⑲と同じ ㉕・㉖・㉗ 混ローム粒褐色土層  
 ㉘ 混ローム粒、木炭粒褐色土層 ㉙ 混ローム粒、灰白色粘土粒褐色土層  
 ㉚ 混灰白色粘土、ローム褐色土層 ㉛ 混ローム小ブロック褐色土層  
 ㉜ 混ローム粒暗灰褐色土層 ㉝ 混ローム褐色土層

第7図 1号・3号断面図・エレベーション図 (1:80)

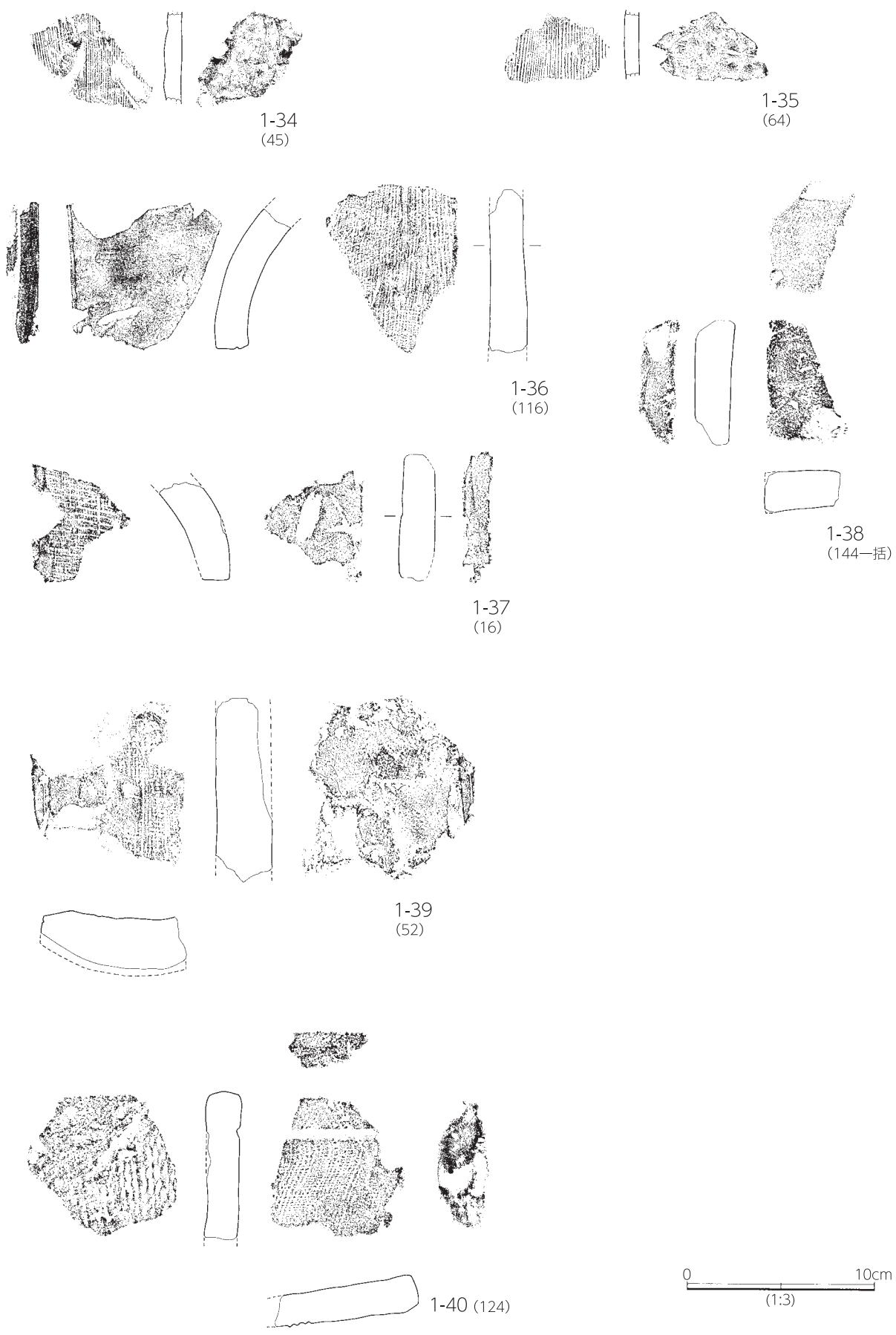


第8图 1号出土遗物实测图(1)

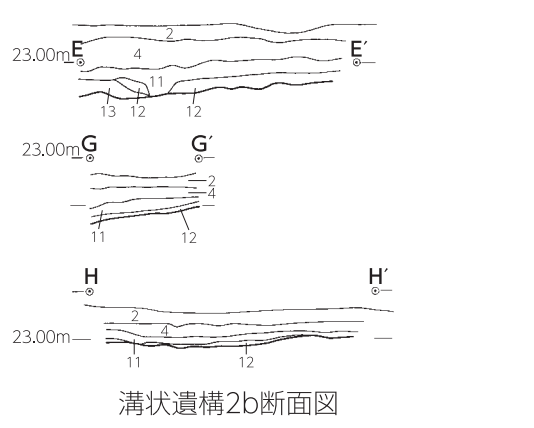
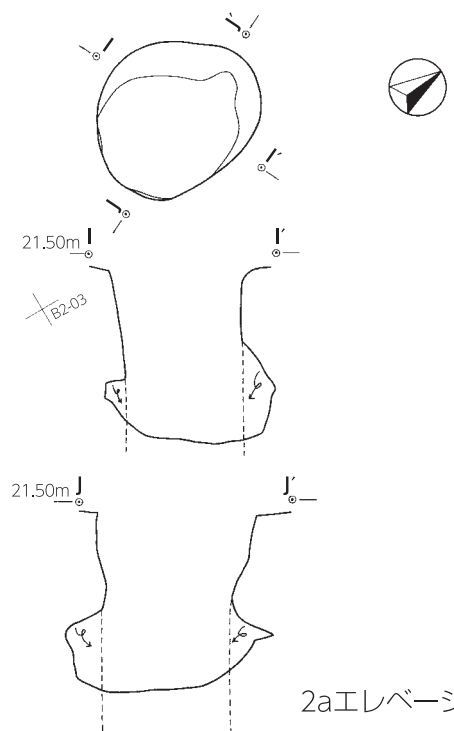
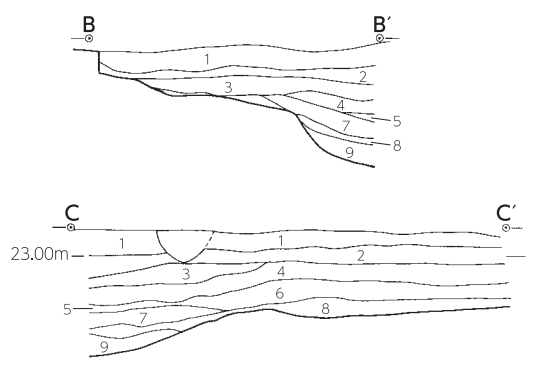
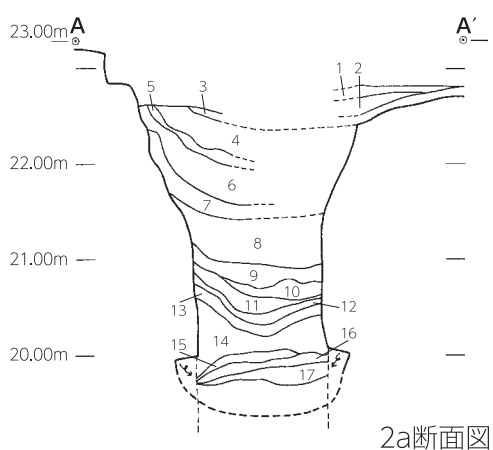
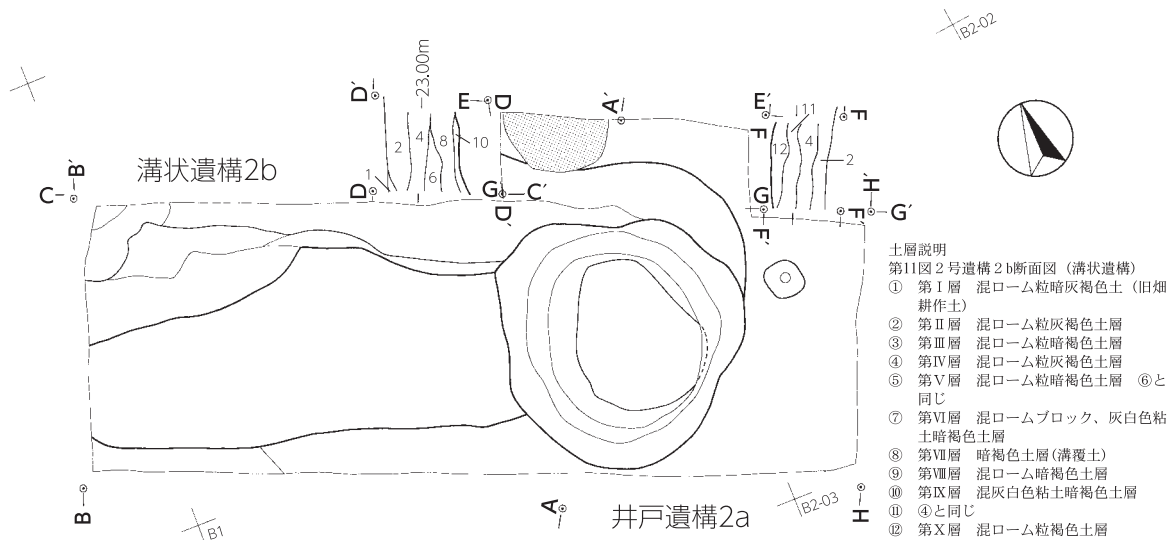




第9图 1号出土文物实测图(2)



第10图 1号出土遺物実測図(3)



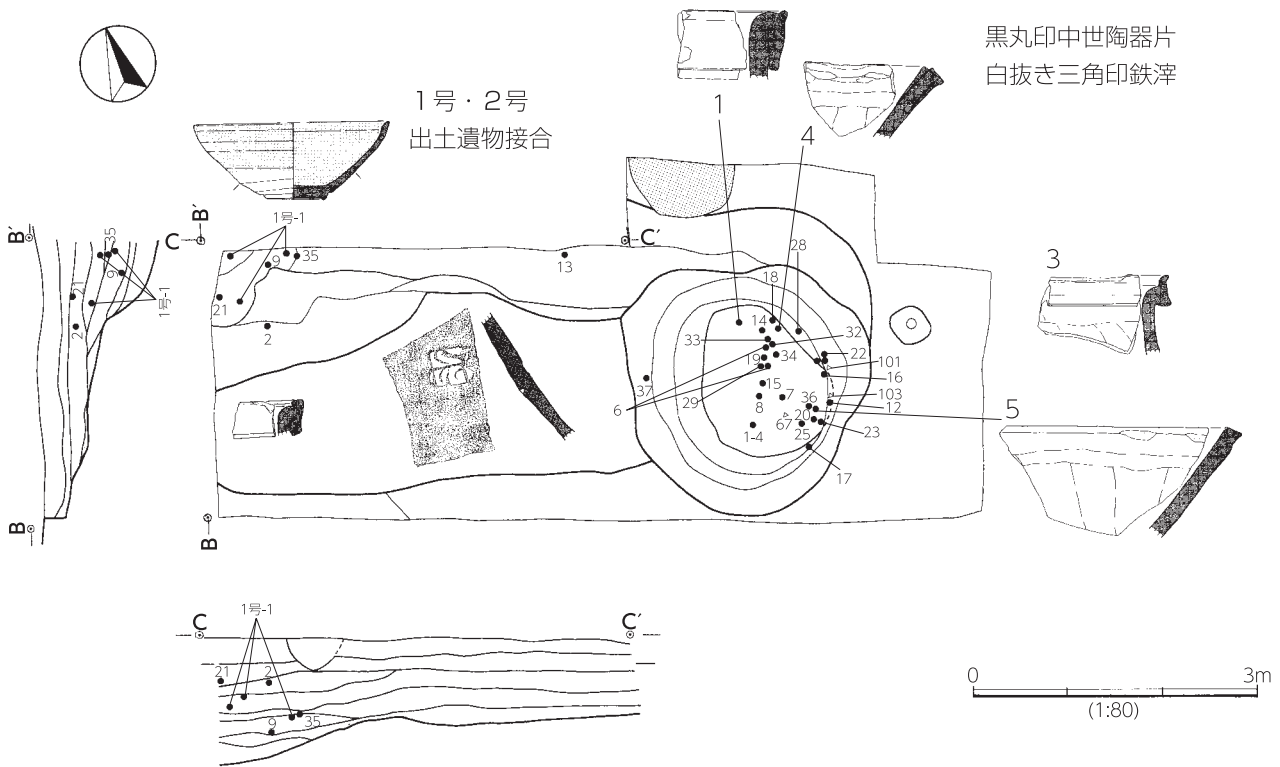
- 土層説明  
 第11図2号遺構2a断面図(井戸状遺構)  
 ① 第I層 混木炭粒、ローム粒灰褐色土層  
 ② 第II層 混ローム粒暗灰褐色土層  
 ③ 第III層 混ローム粒褐色土層  
 ④ 第IV層 混大ロームブロック、崩壊ローム褐色土層(埋め戻し状態)  
 ⑤ 第V層 混ロームブロック暗灰褐色土層  
 ⑥ 第VI層 混ロームブロック崩壊ローム褐色土層(埋め戻し状態)  
 ⑦ ⑥と同じ  
 ⑧ 第VII層 混ロームブロック、灰白色粘土塊、ソクソク褐色土層  
 ⑨ 第VIII層 混ロームブロック暗褐色土層  
 ⑩ 第IX層 混ロームブロック、灰白色粘土塊暗褐色土層  
 ⑪ ⑥と同じ  
 ⑫ 第X層 混ローム暗褐色土層  
 ⑬ ⑭ ⑥と同じ  
 ⑮ ⑯と同じ  
 ⑰ 混崩壊ローム褐色土層 以下は⑯と同じ

第11図 2号遺構平断面図(1:80)



第4号遺構は、第3号土坑の北に隣接する地下式土坑で、1号の墓域に伴うと考えられる。土坑の入り口は北東側にあり、第5図のエレベーションI~I'は、ほぼ北東から南西方向である。入り口断面は、第5図K~K'に示すとおり、埋め戻しされていると推測される。地下式土坑内部は、出入りの縦坑から土砂が流れ込み、また天井部のローム地山から剥落崩落が数度観察され、調査時は全く埋没していた。4号に埋納されたであろう伴う遺物の検出はない。

第1号方形区画墓域の、台地整形範囲の東辺は約14m、北辺は10m以上の規模がある。第3図地形図では、⑪がその位置にあたるが、南西側の台地に斜面があり区画が開放されるのは谷の低地がある方向と考えられる。第6図の遺物出土位置は、区画整形の北側斜面からの流れ込みが多いことを示している。遺物の出土状態は第6図に示すとおり散在しており、明確に1号遺構に伴うものはないが、15世紀を最後としており、出土した銅銭もすべて北宋銭である。第1号出土遺物の実

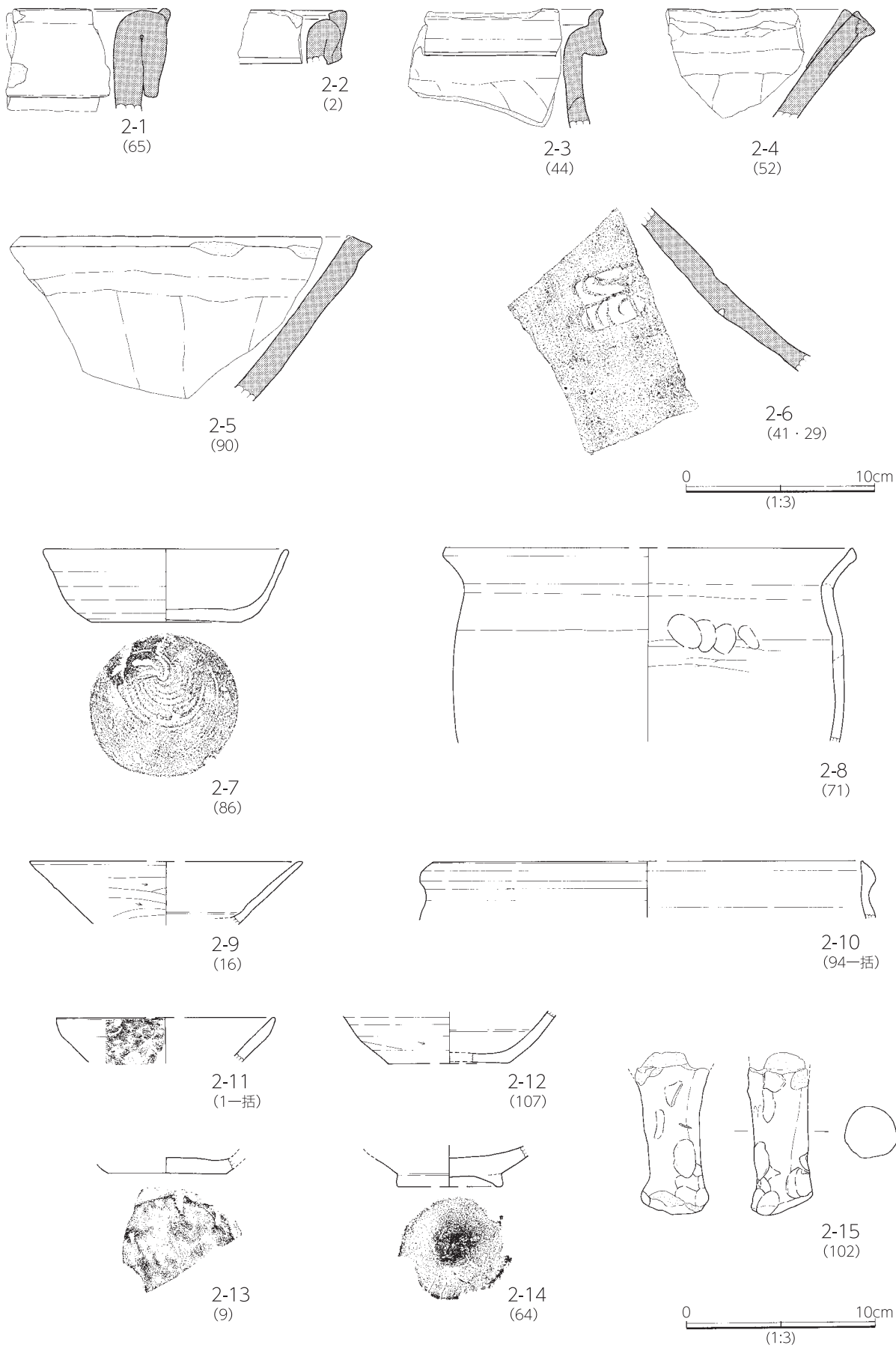


第12図 2号遺構遺物出土地点(1:80)

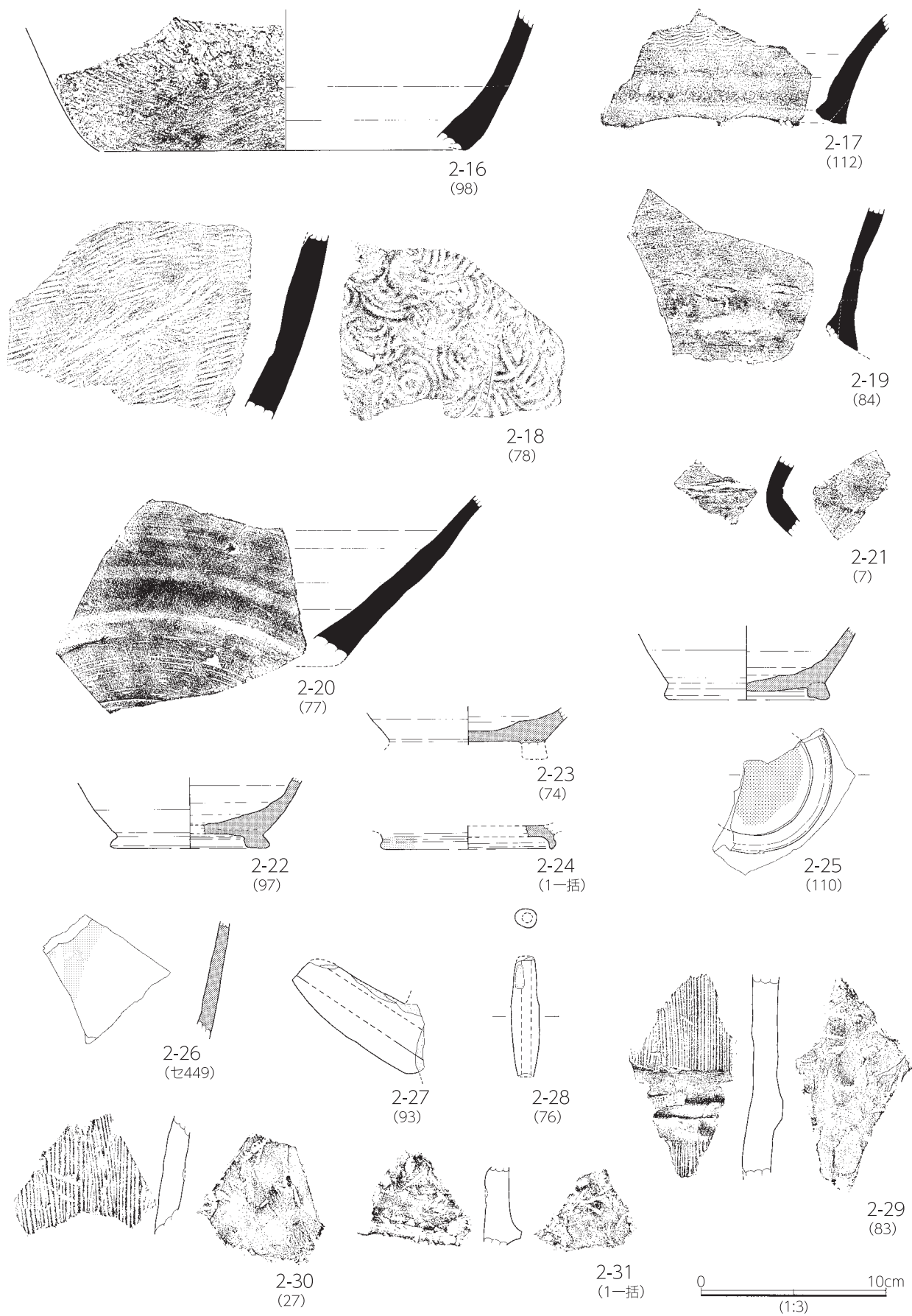
測図は第8図~第10図にあり、遺物観察表は、第2表①~④に掲載している。

2号遺構は、確認調査の段階で井戸状遺構とされ、本調査では、安全確保のため2段階掘削を行った。しかし遺構確認面から-3mを越えた深度から、壁面の崩落が見られ、ローム地山側壁が抉れて底状になり、危険になったため-3.5m以上の掘削を断念した。第11図2a断面の観察では、遺構確認面の段階で、埋め戻し行為がなされ、完全に平坦化封鎖されている。覆土断面観察に拠れば、埋め戻し前より井戸壁面は崩壊しており、古代中世遺物が混ざる瓦礫と、ローム地山掘削土によって、埋め戻されたことがわかる。

第11図C・D断面では、同じ番号の第2号遺構の溝状遺構は、井戸状遺構に伴うものと考えられ、

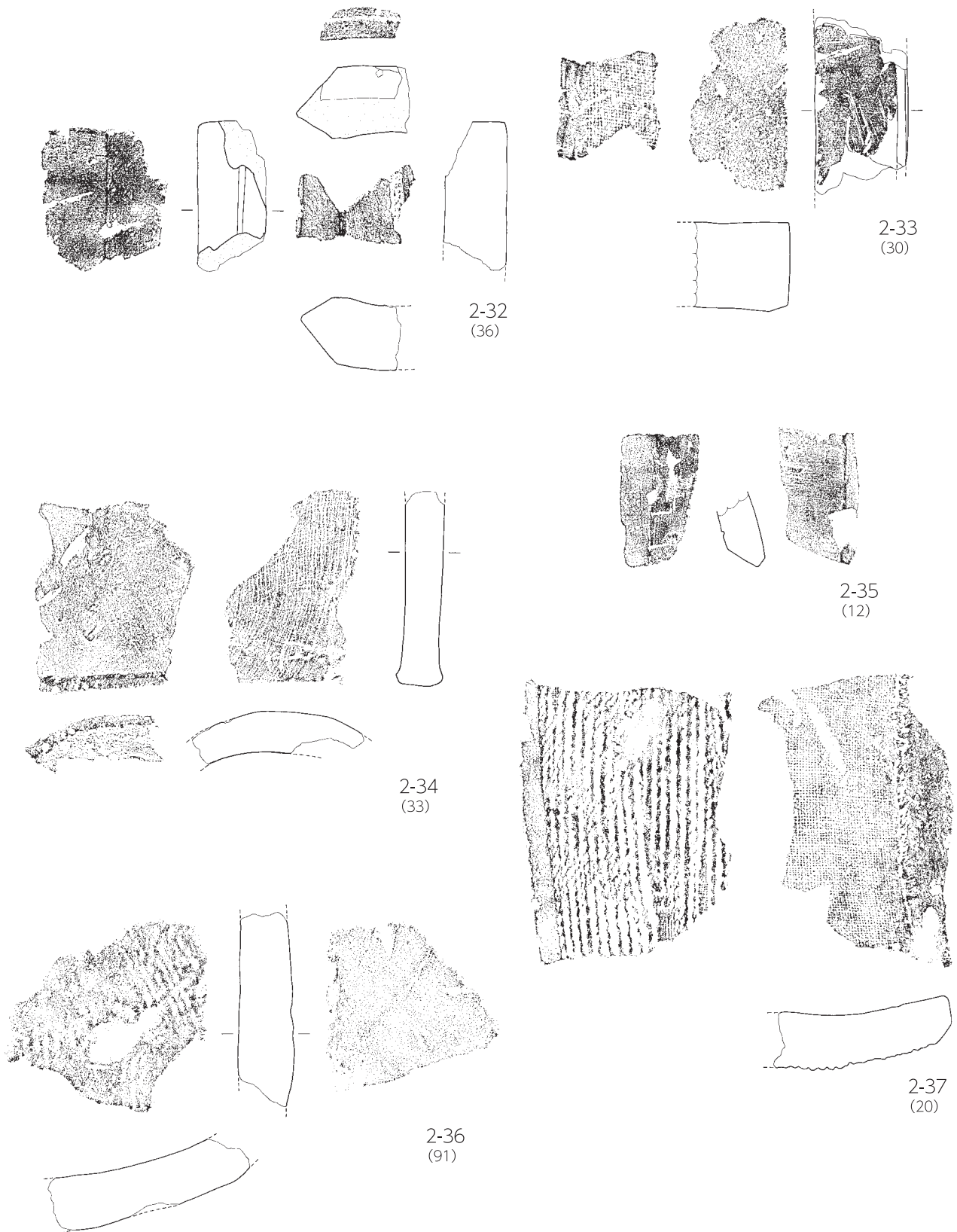


第13图 2号出土遗物实测图(1) (1:3)



第14图 2号出土遗物实测图(2) (1:3)





第15图 2号出土遺物実測図(3) (1 : 3)

井戸埋め戻し後の埋没土壌に乱れはない。溝状遺構西端に第12図が示すように瀬戸美濃系の平碗が出土しており、4～5m離れた1号遺構出土遺物と接合した。第2表①の観察表に拠れば、第2号井戸状遺構は、常滑甕と片口鉢はⅡ類の9型式が出土しており、当該時期の15世紀前半以降が、廃絶時期と考えられる。同じく溝状遺構出土の瀬戸美濃系の平碗も当該時期と考えられる(笹生a1998)。

2号遺構には埋められる土砂の中に、古代以前の須恵器、土師器、布目瓦、磚が、中世遺物と混ざって投棄されている。それらは金属の鋭利の鋤鍬等によって傷つけられており、多数のガジリ傷が見られる(第2表②・③)。第13図2-15の獣足は、竹の内地籜表採の獣脚と非常に類似し、3脚中の2脚目の検出となった(高橋1994第21図9)。第14図2-29～31は円筒埴輪片であり、郡本地区では、現在全く確認されない埴輪を有する古墳があったことが、推測される。

第1号遺構は、方形区画された台地整形遺構において、地域調査先例の加茂台遺跡から、墓域と考えられる(半田1998)。そのため、第3号土坑及び第4号地下式土坑は墓域に伴う墓坑と考えた。第2号と1号遺構の関連は明確ではないが、平碗の底部片と口縁部が2号、口縁部が1号と部位がバラバラに出土しているため、遺構の使用時期より、埋没過程の時期が同じであった可能性が高い。今回調査出土遺物の中世陶磁器中で、常滑窯製品においては、編年表によれば13世紀から14、15世紀前半までの時期の遺物があり、最後に埋積埋没した時期が15世紀と考えられる。台地上の井戸については、上総国分僧寺跡の第1640号遺構に、その検出例がある(櫻井2009)。上総国分僧寺事例の規模は大きく、一辺4m以上の方形の掘り方をしている。対して、今回調査検出例は、円形で径1.5m前後と小規模は小さい。そのため第2号井戸状遺構は、出土遺物から時期判定はできないが、検出した崩落状態や構造から当時の維持管理上、古代までは遡らないと推測される。

第2号井戸状遺構は、埋め戻しの投棄された陶器等のほかに、アカニシ、カキの貝殻片や、破碎された獣骨があり、その一部は分析同定の結果、ヒトの右大腿骨もあることがわかった(金子浩昌先生同定)。そのため第2号の井戸状遺構は、付近の瓦礫やその他あらゆるものを、容赦なく埋め戻しの材料に使用したことがわかる。しかし第1号遺構及び第2号の付帯する溝状遺構は、自然に埋没しており、これらのことから、墓地に隣接する井戸状遺構に対しての埋め戻しは、大きな人間の営為作用の結果として残されたことになる。

## 第3章 ま と め

### 小 結

郡本遺跡群は第1表調査一覧の様に、郡衙、国衙のある古代時期中心に調査研究が進められ、着実に成果として報告がなされてきたが、今回の第12次調査は、平成20年度の第11次の確認調査結果を基に、郡本遺跡群の中世時期の認識を新たにするものである。第11次確認調査（牧野2009）において検出された第1トレンチの溝状遺構は、平成4年度検出の大溝（高橋1994第17・20図）に連絡する可能性が高いと思われる。平成4年度調査の大溝の覆土の色調は、灰褐色から褐色を呈する。その覆土ローム粒を多く含み、ローム粒の影響からサクサクしており、千葉県下中世城郭に通有する、典型的な中世後半時期の土壌と考えられる。それらは、今回第12次調査の遺構とも共通しており、市原市内の調査事例とも矛盾しない。そのため、郡本遺跡群は今後の調査から、中世遺構の存在も認識しつつ、調査研究を進めることが必要である。

今回調査の第1号遺構である方形区画台地整形遺構としての、明確な市原市内調査例としては、加茂台遺跡（半田1993）、草刈六之台遺跡（小林1994）、菊間手永遺跡（近藤1987）、山木白船城跡Ⅱ（櫻井1997）、能満城跡（近藤a2004）が挙げられる。それらは中世の市原荘内と考えられ、その中世墓地墓域が近世段階まで継続するのは、加茂台遺跡と、草刈六之台遺跡がある。郡本地区における今回の調査例は、第2図の示す近世郡本村の背後の台地上に位置する。しかしその位置は、近世の街道沿いに位置している。国府国衙地域での調査事例では、静岡県磐田市一の谷遺跡（山崎ほか1993）が著名であり、その中世墓域についての歴史的意義を説明している（石井1993）。

郡本遺跡群地区の中世においては、今後の調査研究に負うところが多いが、上総国分僧寺の調査成果（櫻井2009）から、中世についての予想が可能ならば、西暦1192年鎌倉幕府成立を受けて画期がある。国分僧寺ⅩⅢ期に僧寺の伽藍再興と、周辺施設と伽藍東南部方形館含めた施設が展開する。ⅩⅣ期の13世紀後半には、屋敷地を伽藍南部移転して14世紀中葉まで存続する。その後ⅩⅤ期には方形居館跡地に、地下式坑を含む土坑群が展開し、墓地墓域となる。その時代は14世紀後葉からとしている。これらは中世国衙の動きと連動反映するものと考えられ、郡本遺跡群との関連研究は、これからである。出土遺物に関しては、整理分類を、引用文献86番『上総国分僧寺Ⅰ』「本文篇 2p1232～p1252第6章10世紀末以降における土器変遷」（櫻井2009）の調査分析成果に基づき行っている。詳細については、分類分析検討において「僧寺Ⅰ」本報告に準拠して報告している。なお、第2表③瓦等遺物観察表のA、B、Cは、側、端部の分類を表している。

### 註及び引用参考文献

註1 第2図で使用している下図は復刻されたアナログの地図だが、原図の国土地理院発行のフランス式彩色迅速図は、非特定独立行政法人農業環境研究所が提供する『歴史的農業環境閲覧システム』で、ネット上で公開している。〈[http://haps.dc.affrc.go.jp/habs\\_map.html?](http://haps.dc.affrc.go.jp/habs_map.html?)〉



番号	著者編集者	刊行年	出典	文献	刊行機関
1	瀧口 宏ほか	1949	『市原遺跡発掘調査概報』	『千葉県史跡名勝天然記念物調査報告書』第一輯	千葉県教育委員会
2	鈴木英啓ほか	1979	『唐崎台』	唐崎台遺跡発掘調査団	市原市教育委員会
3	小林清隆ほか	1985	『里長』の墨書土器について	『市原市門脇遺跡』	財団法人千葉県文化財調査センター
4	宮本敬一	1986	『史跡上総国分寺跡』	市原の遺跡(1)	財団法人市原市文化財センター
5	木對和紀	1987	『市原市郡本遺跡』(第1次)	市原市文化財センター調査報告書第14集	財団法人市原市文化財センター
6	大河直弼ほか	1987	『千葉県指定有形文化財府中 日吉神社本殿修理工事報告書』		市原市教育委員会
7	高橋康男	1987	『白船城跡』第1次	市原市文化財センター調査報告書第15集	財団法人市原市文化財センター
8	近藤 敏ほか	1987	『菊間手永遺跡』	市原市文化財センター調査報告書第23集	財団法人市原市文化財センター
9	笹生 衛	1989	『房総における中世の土器様相の成立過程』	『史館』第21号	史館同人
10	笹生 衛	1991	『房総の中世土器様相について』	『史館』第23号	史館同人
11	大谷弘幸	1993	『茂原街道に隣接した溝跡について』	『研究連絡誌』第38号	財団法人千葉県文化財調査センター
12	半田堅三	1993	地下式墳再考ー市原市台遺跡中世遺構の分析ー	市原市文化財センター研究紀要Ⅱ	財団法人市原市文化財センター
13	山崎克己ほか	1993	『第4章 調査成果の整理と分析～第5章まとめ』	『一の谷中世墳墓群遺跡』	磐田市教育委員会
14	石井 進	1993	『一の谷中世墳墓群遺跡の歴史的背景』	『一の谷中世墳墓群遺跡』	磐田市教育委員会
15	小林信一	1994	『第3節中・近世の遺構・第6節中世墓域』	ちはら台ニュータウンⅥ草刈六之台遺跡	財団法人千葉県文化財センター
16	高橋康男	1994	市原市 上総国府推定地確認調査報告書(1)	市原市文化財センター調査報告書第53集	市原市教育委員会
17	大谷弘幸	1994	『西上総地域の古道跡』	『研究連絡誌』第41号	財団法人千葉県文化財調査センター
18	谷島一馬	1994	『上総嶋六駅についてに一考察』	古代上総国の嶋六駅と官道	市原市文化財研究会紀要第1輯
19	田中清美	1995	『市原市郡本遺跡(第2次)』	市原市文化財センター調査報告書第56集	財団法人市原市文化財センター
20	宮本敬一	1996	『上総国 国府一畿内・七道の様相一』	1996年度三重大会シンポジウム2 レジュメ	日本考古学協会
21	小出紳夫	1997	『菊間手永遺跡』	『平成8年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
22	櫻井敦史	1997	『白船城跡Ⅱ』	財団法人市原市文化財センター調査報告書第35集	財団法人市原市文化財調査センター
23	田所 真	1997	『郡本遺跡群(古甲遺跡3次)』	『市原市文化財センター年報平成6年度』	財団法人市原市文化財センター
24	田所 真a	1998	『郡本遺跡群(古甲遺跡4次)』	『市原市文化財センター年報平成7年度』	財団法人市原市文化財センター
25	田中清美	1998	『市原市市原城郭跡』	市原市文化財センター調査報告書第6集	財団法人市原市文化財センター
26	小川浩一	1998	『市原市郡本遺跡(第3次)(第4次)』	『平成9年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
27	須田 努a・b・c	1998	『a光善寺廃寺』『b菊間廃寺』『c上総国分僧寺』	『千葉県の歴史』資料編考古3(奈良平安時代)	千葉県
28	田所 真b	1998	『市原郡衙関連遺跡(郡本遺跡)』	『千葉県の歴史』資料編考古3(奈良平安時代)	千葉県
29	田所 真c	1998	『市原古道遺跡(山田橋～五所)』	『千葉県の歴史』資料編考古3(奈良平安時代)	千葉県
30	郷堀英司	1998	『二日市場廃寺』	『千葉県の歴史』資料編考古3(奈良平安時代)	千葉県
31	笹生 衛a	1998	『中世の焼き物』(年代推定の基準)	『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料』	千葉県
32	笹生 衛b	1998	『村の生活』(上総国畔蒜衝荘横田郷を舞台に)	『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料』	千葉県
33	柴田龍司	1998	『中世城館』	『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料』	千葉県
34	半田堅三	1998	『台遺跡』	『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料』	千葉県
35	田所 真d	1998	『郡本遺跡群』	『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料』	千葉県
36	笹生 衛c	1998	『草刈六之台遺跡』	『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料』	千葉県
37	笹生 衛d	1998	『市原条里制遺跡』	『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料』	千葉県
38	笹生 衛e	1998	『神田遺跡・神田古墳群』	『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料』	千葉県
39	笹生 衛f	1998	『桂遺跡群(神田山第Ⅱ・Ⅲ遺跡)』	『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料』	千葉県
40	鶴岡英一	1999	『市原市郡本遺跡(第4次)』	市原市文化財センター調査報告書第61集	財団法人市原市文化財センター
41	木下 良ほか	1999	『地割復元図七葉』	『上総国府推定地歴史地理学的調査報告書』	市原市教育委員会
42	北見一弘	1999	『郡本遺跡(第5次)』	『平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
43	宮本敬一a	1999	『千葉県市原市能満上細工多遺跡』	市原市文化財センター調査報告書第12集	財団法人市原市文化財センター
44	小久貫隆史ほか	1999	『市原市市原条里制遺跡』	千葉県文化財センター調査報告書第354集	財団法人千葉県文化財センター
45	宮本敬一b	1999	『郡本遺跡は郡衙跡か』	『歴史散歩資料 市原市郡本周辺の遺跡と文化』	市原市地方史研究連絡協議会
46	宮本敬一c	1999	『忘れられた社寺ー守公神と神主院ー』	『歴史散歩資料 市原市郡本周辺の遺跡と文化』	市原市地方史研究連絡協議会
47	田所 真	1999	『市原の神社と柳橋神事』	『歴史散歩資料 市原市郡本周辺の遺跡と文化』	市原市地方史研究連絡協議会
48	小高春雄	1999	『能満城跡』	『市原の城』	小高春雄自主出版
49	笹生 衛	1999	『東國中世村落的景観変化と画期』	『千葉県史研究』第7号	千葉県
50	田所 真	2000	『郡本遺跡群(古甲遺跡第5次)』	『市原市文化財センター年報平成8年度』	財団法人市原市文化財センター
51	宮本敬一a	2000	『能満・府中国府説について』	『歴史散歩資料 市原市能満周辺の遺跡と文化』	市原市地方史研究連絡協議会
52	宮本敬一b	2000	『守公神』補遺9 p	『歴史散歩資料 市原市能満周辺の遺跡と文化』	市原市地方史研究連絡協議会
53	宮本敬一c	2000	『光善寺廃寺跡』	『歴史散歩資料 市原市能満周辺の遺跡と文化』	市原市地方史研究連絡協議会
54	田所 真	2000	『古甲遺跡』	『歴史散歩資料 市原市能満周辺の遺跡と文化』	市原市地方史研究連絡協議会
55	田中清美	2000	『市原城跡』	『歴史散歩資料 市原市能満周辺の遺跡と文化』	市原市地方史研究連絡協議会
56	安藤 登	2000	『釈蔵院ならびに周辺の石造物』追記分4 p	『歴史散歩資料 市原市能満周辺の遺跡と文化』	市原市地方史研究連絡協議会
57	牧野光隆	2001	『能満遺跡群二階台地点』	『平成12年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
58	小川 信	2001	『中世都市「府中」の展開』	『思文閣史学叢書』	株式会社思文閣出版
59	櫻井敦史	2002	『市原市小島向遺跡Ⅱ』	財団法人市原市文化財センター調査報告書第77集	財団法人市原市文化財センター

60	浅利幸一	2003	「市原市稲荷台遺跡」	『上総国分寺台遺跡調査報告書Ⅹ』	市原市教育委員会
61	田所真ほか	2003	「郡本遺跡群(市原郡衙推定地)」	『平成14年度市原市内遺跡緊急発掘調査概要』	市原市教育委員会
62	牧野光隆	2003	「稲荷台遺跡」(J地点)	『平成14年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
63	近藤 敏	2003	「能満城跡遺跡(馬場ノ内館跡12年度)」	『市原市文化財センター年報平成12年度』	市原市文化財センター
64	小高春雄	2003	「千葉県における地域別城郭研究史Ⅶ市原市域」	『千葉城郭研究』第7号	千葉城郭研究会
65	櫻井敦史	2003	「県内における中世村落の発展について」	『市原市文化財センター研究紀要』Ⅳ	市原市文化財センター
66	田中清美	2003	「謎の千草山廃寺跡Ⅱ」	『市原市文化財センター研究紀要』Ⅳ	市原市文化財センター
67	櫻井敦史	2004	『市原市片又木遺跡Ⅲ』	市原市文化財センター調査報告書第87集	市原市文化財センター
68	小川浩一	2004	「郡本遺跡群(門前地区)」	『市原市文化財センター年報平成13・14年度』	市原市文化財センター
69	近藤 敏 <sup>a</sup>	2004	「能満城跡遺跡(13年度)」	『市原市文化財センター年報平成13・14年度』	市原市文化財センター
70	高橋康男	2004	「古甲遺跡(第6次)」	『市原市文化財センター年報平成13・14年度』	市原市文化財センター
71	近藤 敏 <sup>b</sup>	2004	「能満城跡遺跡 (14年度)」	『市原市文化財センター年報平成13・14年度』	市原市文化財センター
72	相京邦彦ほか	2004	『市原市郡本遺跡』	千葉県文化財センター調査報告書第491集	千葉県文化財センター
73	佐藤博信	2004	「高野山『西門院文書』の再検討ー釈藏院快弁書状をめぐってー」	『千葉史学』4 5	千葉史学会
74	櫻井敦史	2005	「第4章及び第5章3節 中・近世の遺構と遺物」	『市原市西広貝塚Ⅱ』調査報告書第93集	市原市文化財センター
75	大村直ほか	2005	「郡本遺跡群 (第6次)」	『平成16年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
76	小川浩一	2005	『市原市海上地区遺跡群』	市原市文化財センター調査報告書第97集	千葉県千葉農林振興センターほか
77	大谷弘幸	2005	「市原条里に関する基礎的研究」	『千葉県文化財センター研究紀要』24号	千葉県文化財センター
78	小高春雄	2005	「房総中世城館の発展過程」	『千葉県文化財センター研究紀要』24号	千葉県文化財センター
79	櫻井敦史	2005	「市原八幡宮と中世八幡の都市形成」	『市原市文化財センター研究紀要』Ⅴ	市原市文化財センター
80	近藤 敏	2005	「能満城跡遺跡(16年度)」	『市原市文化財センター年報平成15・16年度』	市原市文化財センター
81	近藤 敏	2006	「能満城跡遺跡(16年度分補遺)」	『市原市文化財センター年報平成17年度』	市原市文化財センター
82	大村 直	2006	「能満遺跡群地楽寺地区」	『市原市文化財センター年報平成17年度』	市原市文化財センター
83	加藤久雄ほか	2006	「市原城郭跡出土の中近世人骨」	『市原市文化財センター研究紀要』Ⅵ	市原市文化財センター
84	小川浩一	2008	「郡本遺跡群(第7次)」	『平成19年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
85	牧野光隆	2009	「郡本遺跡群(第8次・10・11次)」	『平成20年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
86	櫻井敦史ほか	2009	『上総国分僧寺Ⅰ』	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第8集	市原市教育委員会
87	小川浩一	2009	『市原市山田遺跡群』	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第9集	市原市教育委員会

第2表 遺物観察表①中世陶磁器

遺構番号	図版番号	挿図番号	図版番号	注記番号	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	全体遺存量	焼成	器面色調	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	胎土	産地時期	備考
1	8	1-1	7	2号・5・8・10号-61	瀬戸・美濃系陶器	平碗	体部ロクロ調整後、裏返して下位を右回転ヘラケズリ調整。 底部は高台を削り出しているが低く、中央には右回転糸切痕を残す。体部中位以上に灰釉を浸し掛ける。釉層は薄い。	全面灰釉施釉	1/3	良好	釉：5Y6/4オリーブ黄 外面露胎部10YR7/4にぶい黄橙 断面：同上	(15.3)	6.0	4.4	15.4	硬密で白色粒含む	後III	1号61、2号5・10は口縁部、2号8の底部に煤付着している。また確認調査の2トレンチ5の口縁部が接合
1	8	1-2	7	1号-133	龍泉窯系青磁	碗	あまり鋭くない細長の錦蓮弁文を刻出し、青磁釉を施釉する。釉層は複層あり、やや厚い。	無文で全面施釉	小片	優	釉：10Y5/2オリーブ灰 Y7/1灰白	(14.2)	-	-	(14.4)	密で硬質	A-I類	1号方形区画墓域中央北側辺部から出土。
1	8	1-3	7	1号・51・96・99・110・131	瓦質土器	釜	肩部に外耳を付し、外耳下位に受け状の粘土帯を貼り付ける。この接合部は体部側にヘラ工具で多数刺突をすることで、接着性を増している。口唇部から体部にかけてヘラ状工具で横方向にミガキ、燻している。体部下位は使用痕として煤が全面に付着。	布あるいは板状の工具で横方向にナデ。	1/4以下	良好	外面：N6/灰 内面：2.5Y7/1灰白	(13.7)	-	-	(23.4)	黒色粒多く、やや砂っぽい	中世非在地か	1号方形区画墓域北側辺部から集中して出土している(第6図参照)。
1	8	1-4	7	1号・86・2号・72	常滑	甕	口縁帯は密着、頸部との接合付近をやや強く横方向にナデ締め。頸部下位はヘラ状工具で横方向にナデ。	横方向ナデ	小片	優	外面：7.5YR5/3にぶい褐 内面：7.5YR4/1褐灰 断面：内面と同じ	-	-	-	-	白色粒含み、焼き締まる	7型式	1号方形区画墓域内4号地下式坑上から出土2号と接合
1	8	1-5	7	1号-80	常滑	片口鉢II類	口縁は帯状にナデ整形し、指頭で押さえ、注口部を作る。	口縁周辺は横方向ナデ。	小片	優	外面：5YR4/4にぶい赤褐 内面：5YR5/4にぶい赤褐 断面：10YR5/2灰黄褐	-	-	-	-	珪質粒含み、焼き締まる	5型式	
1	8	1-6	7	1号-123	土師質土器	カワラケ(小皿)	体部は段ナデを思わせる屈曲があるが、鋭さはなく、丸い。底部は突出し、右回転糸切痕を無調整で残す。	見込みは円柱状の高まりをこく若干見せ、中央にこく軽い横方向ナデ。	1/4	良好	7.5YR6/6橙	(7.6)	(2.0)	(3.5)	(7.9)	石英微粒・海綿骨針含み、褐鉄鋼中粒多い	在地僧寺III類(X~XII期)	
2	13	2-1	11	2号-65	常滑	甕	口縁は幅広い縁帯を折り返す。	口縁付近は布状工具で横方向ナデ	小片	優	外面：5YR4/4にぶい赤褐 内面：5YR5/4にぶい赤褐 断面：10YR7/2にぶい黄橙	-	-	-	-	白色粒・微黒粒含み、焼き締まる	9型式	
2	13	2-2	11	2号-2	常滑	甕	口縁帯は上方が受け口状、下方は頸部に密着。	頸部は横方向ナデ、口縁帯との境はヘラ状工具でナデ、整える。	小片	優	外面：10YR3/1黒褐 内面：5YR4/1褐灰 断面：10YR6/1褐灰	-	-	-	-	白色粒含み、焼き締まる	7型式	
2	13	2-3	11	2号-44	常滑	甕	肩は縦方向にヘラ状工具でナデているようだが、最終的なナデ調整のため明確でない。頸部は横方向ナデ。口縁帯の下方はやや伸びるが頸部に付かず、若干外反する。	頸部は横方向ナデ、口縁帯との境はヘラ状工具でナデ、整える。	小片	優	外面：2.5YR4/4にぶい赤褐 内面：2.5YR3/4暗赤褐 断面：10YR7/1灰白	-	-	-	-	長石大粒含み、焼き締まる	6a型式	
2	13	2-4	11	2号-52	常滑	片口鉢II類	体部は縦方向ヘラケズリ後、口縁下を横方向ナデ。注口は両側を指頭で押さえ作る。	横方向ナデ	小片	優	外面：5YR4/1褐灰 内面：2.5YR5/4にぶい赤褐 断面：10YR5/1褐灰	-	-	-	-	長石粒多く、焼き締まる	8型式	
2	13	2-5	11	2号-90	常滑	片口鉢II類	木目のある板工具で体部をヘラケズリし、頸部を横方向ナデ。	木目のある板工具で体部を斜上方にナデ、口縁付近を横方向ナデ	1/4以下	良好	外面：5YR5/4にぶい赤褐 内面：2.5YR4/2灰赤 断面：10YR4/2灰黄褐	-	-	-	-	長石粒含む	9型式	砥石に転用したため、口縁面取りの内角部が磨耗している。
2	13	2-6	11	2号-41・29	常滑	甕	肩部に押印を施す。	指頭による横方向ナデ。	小片	優	降灰：2.5Y7/4浅黄 外面：7.5YR3/3暗褐 内面：7.5YR5/3にぶい褐 断面：2.5Y6/1灰灰	-	-	-	-	白色粒含み、焼き締まる	中世	



第2表② 遺物観察表（土師器・須恵器・土製品・金属製品）

遺構番号	遺構種別	挿図	番号	図版	注記	器種	部位	全体遺存量	焼成(状態)	器面色調	口径(cm)	底径(cm)	胎土又は重量	備考
1	方形区画墓域	8	1-7	7	1号-31	土師カメ	口縁	1/10以下	良	橙色	(30.0)		緻密	胴部タタキ目
1	"	8	1-8	7	1号-10	土師カメ	口縁	1/10以下	良	橙色	(13.0)			胴部ケズリ
1	"	8	1-9	7	1号-131	土師カメ	口縁	1/11以下	良	黄灰	(13.0)			口縁部内面ナデ沈線
1	"	8	1-10	7	1号-139	内黒碗	高台	底部のみ	良	黒・橙色		6.5		高台部磨減
1	"	8	1-11	7	1号-14	土師碗	底部	底部のみ	良	淡橙色		60.0		
1	"	8	1-12	7	1号-82・115	土師碗	底部	底部のみ	良	淡橙色		70.0		糸きり
1	"	8	1-13	7	1号-144	土師高杯	脚部	接合部のみ	良	淡橙色				円スカン1か所残存
1	"	8	1-14	7	1号-66	土師碗?	底部	底部のみ	良	淡橙色		40.0		碗内面平滑ヘラ仕上げ
1	"	8	1-15	7	1号-34	土師カメ	取っ手	ツマミ部分	良	淡橙色				ない面部分ガジリ
1	"	8	1-16	7	1号-67・71	灰釉	底部	1/6	良	灰白色		80.0		
1	"	8	1-17	7	1号68	須恵器皿	底部	1/5	良	灰色		120.0		
1	"	9	1-18	8	1号-95	須恵器甕	頸部	1/6	優	褐灰色			長石混入	
1	"	9	1-19	8	1号-119	須恵器甕	頸部	小片	優	褐灰色			砂礫粒	
1	"	9	1-20	8	1号-122	須恵器甕	頸部	小片	優	黒灰色				
1	"	9	1-21	8	1号-21	須恵器甕	頸部	小片	優	灰色			長石混入	
1	"	9	1-22	8	1号-22	須恵器甕	頸部	小片	優	灰色黒色				
1	"	9	1-23	8	1号-144	壺	頸部	小片	優	黒灰色				
1	"	9	1-24	8	1号-23	灰釉壺?	底部	1/4	優	灰色				黒色点状斑が多い
1	"	9	1-25	8	1号-106	壺	底部	1/5	良	灰色				
1	"	9	1-26	8	1号-60	灰釉皿	底部	1/6	良	灰色				
1	"	9	1-27	8	1号-144	釘		先端欠損					4.1g	
1	"	9	1-28	8	1号-75	釘		先端欠損					3.3g	
1	"	9	1-29	8	1号-83	鉄片		先端部のみ					3.4g	
1	"	9	1-30	8	1号-2-1	北宋銭		完形					3.1g	元豐通寶(1078~1085年)
1	"	9	1-31	8	1号-2-2	北宋銭		完形					3.8g	祥符通寶(1008年)
1	"	9	1-32	8	1号-2-3	北宋銭		完形					3.6g	聖宋元寶(1101年)
1	"	9	1-33	8	1号-69	北宋銭		破片					(1.2g)	太(平通)寶(976~983年)
1	"	10	1-34	9	1号-45	円筒埴輪	胴部	小片	良	明橙色				焼砂混入
1	"	11	1-35	10	1号-71	円筒埴輪	胴部	小片	良	赤褐色				ガジリが多い
2	井戸	13	2-7	11	2号-86	土師器杯	口縁部欠け		良	灰褐色	13.0	7.5	白色粒混	底部にモミ痕跡
2	"	13	2-8	11	2号-8	土師器甕	口縁胴部	小片	良	赤褐色	(22.0)			
2	"	13	2-9	11	2号-16	土師器杯	口縁	小片	良	淡灰褐色	(13.5)			
2	"	13	2-10	11	2号-94	土師器甕	口縁	小片	良	黒褐色	(22.0)			
2	"	13	2-11	11	2号-1	土師器杯	口縁	小片	良	淡橙色	(12.0)			
2	"	13	2-12	11	2号-107	土師器杯	底部	小片	良	淡橙色		10.0		ヘラ切り底整形
2	"	13	2-13	11	2号-9	土師器杯	底部	小片	良	淡橙色		7.0		ヘラ切り底整形
2	"	13	2-14	11	2号-93	土師器杯	底部	小片	良	淡橙色		7.5		高台磨減
2	"	13	2-15	11	2号-102	土師質	獸足		良	暗褐色				指痕が多い
2	"	14	2-16	12	2号-98	須恵器甕	底~胴部	小片	良	灰色				磨減摩耗顕著
2	"	14	2-17	12	2号-71	須恵器甕	頸部	小片	良	灰色			雲母大量	ガジリが多い
2	"	14	2-18	12	2号-78	須恵器甕	胴部	小片	良	黒灰色			白色粒混	ガジリが多い
2	"	14	2-19	12	2号-84	須恵器甕	頸部	小片	良	黒灰色			白色粒混	
2	"	14	2-20	12	2号-77	須恵器甕	底~胴部	小片	軟	灰白色			白色粒混	
2	"	14	2-21	12	2号-7	須恵器甕	頸部	小片	良	灰白色				
2	"	14	2-22	12	2号-97	灰釉壺	底部	1/4	良	灰色		9.0		ガジリが多い
2	"	14	2-23	12	2号-74	灰釉壺	底部	底部のみ	良	灰白色		8.5		意図的に高台除去
2	"	14	2-24	12	2号-1	灰釉皿	底部	小片	良	灰白色		9.0		
2	"	14	2-25	12	2号-82	灰釉壺	底部	1/4	良	灰色				内外面底墨付着?
2	"	14	2-26	12	2号-83	灰釉瓶	胴部	小片	良	灰白色				内面灰軸全面
2	"	14	2-27	12	2号-93	注口土器	注口部	注口のみ	良	赤褐色				ガジリが多い
2	"	14	2-28	12	2号-76	土鏝		ほぼ完形	良	淡黄褐色				ガジリが多い
2	"	14	2-29	12	2号-83	円筒埴輪	凸帯部分		良	赤褐色				ガジリが多い
2	"	14	2-30	12	2号-76	円筒埴輪		小片	良	赤褐色				ガジリが多い
2	"	14	2-31	12	2号-76	円筒埴輪	凸帯部分		良	赤褐色				ガジリが多い

第2表③ 瓦等遺物観察表

軒平瓦分類表

遺構	挿図番号	番号	挿図番号	注記	凸面調整	条数	筋数	A	B	C	A	B	C	重量(g)	備考
2	15	2-32	13	2号-36	ナデ	-	-					○		177.0	光善寺からか?
合計								0	0	0	0	1	0	177.0	

平瓦分類表

1	10	1-40	8	1号-124	縄目	(14)	(8)							50.0	ガジリが多い
1	10	1-39	8	1号-52	-	-	-					(○)		230.0	ガジリが多い
1				1号-134	縄目	12	(7)	○			○			129.0	
1	10	1-38	8	1号-144	-	-	-	○						50.8	砥石に転用
2	15	1-36	13	2号-91	縄目	(11)	(8)							315.0	ガジリが多い
2				2号-1	縄目	-	-							30.0	
2				2号-32	縄目	(12)	(8)							134.0	砥石に転用
2	15	2-37	13	2号-20	縄目	10	8						○	539.0	赤色顔料塗付か?
合計								2	0	0	1	(1)	1	1018.0	

丸瓦分類表

1	10	1-37	8	1号-16	ナデ	-	-					○		73.0	ガジリが多い
1				1号-21	ナデ	-	-							40.8	
1	10	1-36	8	1号-116	ナデ	-	-			○				152.0	ガジリが多い
2	15	2-35	13	2号-12	ナデ	-	-				○			67.0	ガジリが多い
2	15	2-34	13	2号-33	ナデ	-	-				○			229.0	ガジリが多い
合計								0	0	1	1	2	0	561.8	

磚瓦分類表

2	15	2-33	13	2号-30	ナデ	-	-						○	243.0	ガジリが多い
合計								0	0	0	0	0	1	243.0	

第2表④ 石材・鉄滓等観察表

遺構番号	遺構種別	注記	種別	形状	外面の特徴	全体遺存量	被熱	器面色調	長軸長(mm)	短軸長(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材名	備考
1	方形区画墓域	121	割礫片	一割面礫	礫面に敲打痕跡	片部	有り	礫面黒化	81	54	32	220	第四紀輝石安山岩	割れひびあり
1	方形区画墓域	118	鉄滓	椀形	上面気泡立ち	完形	—	—	60	55	21	112	—	—
1	方形区画墓域	89	鉄滓	椀形	上面気泡立ち	完形	—	—	49	43	17	78	—	—
1	方形区画墓域	113	鉄滓	椀形	上面気泡立ち	完形	—	—	52	40	26	66	—	—
1	方形区画墓域	43	鉄滓	椀形	上面気泡立ち	破片	—	—	28	22	17	15	—	—
1	方形区画墓域	98	鉄滓			破片	—	—	30	20	15	9	—	—
1	方形区画墓域	144	鉄滓			破片	—	—	24	22	8	8	—	—
1	方形区画墓域	131	鉄滓			破片	—	—	24	16	5	5	—	—
2	井戸	105	礫	長方形	頂部に敲打痕跡	完形	有り	一部黒化	84	72	64	830	ドレライト	座りがよい
2	井戸	99	割礫片	一割面礫	礫面に敲打痕跡	片部	全面	赤化	118	82	27	340	斑れい岩	被熱により軟質化
2	井戸	88	割礫片	一割面礫	礫面に敲打痕跡	片部	全面	若干赤化	105	77	38	570	輝石安山岩	割面黒化
2	井戸	111	割礫片	七面割礫	礫面に敲打痕跡	片部	全面	若干赤化	112	94	59	650	砂岩(硬質)	割面黒化
2	井戸	94	丸礫		礫端部に敲打痕跡	完形	全面	風化黒色	65	48	26	110	砂岩(硬質)	
2	井戸	114	丸礫		脆い荒い砂質	完形	?	灰色	55	36	20	40	砂岩(新第三紀)	軟質砂
2	井戸	92	割礫片	三面割礫	礫面に敲打痕跡	片部	全面	礫面赤化	122	114	48	920	輝石安山岩(第四紀)	割面黒化
2	井戸	89	割礫	八面割礫	礫面頂部に敲打痕跡	完形	全面	全面黒化	130	100	94	1,760	輝石安山岩(第四紀)	砧(金床石)
2	井戸	4	割礫	10面割礫	礫面あり崩壊	?	全面	全面黒化	45~10	30~10	30~5	全220	安山岩	被熱崩壊
2	井戸	42	割礫片	一面割礫	礫面頂部に敲打痕跡	片部	全面	割面黒化	123	109	23	480	輝石安山岩	
2	井戸	1	割礫	二面割礫	礫面に敲打痕跡	片部	?	灰色	68	46	45	250	輝石安山岩	
2	井戸	60	割礫	五面割礫	三面黒化	片部	全面	黒~灰	107	75	42	440	輝石安山岩	被熱崩壊
2	井戸	61	割礫	五面割礫	砂化	片部	全面	灰色茶色	137	107	66	710	凝灰岩	軟質砂
2	井戸	62	割礫	五面割礫	荒い砂礫	片部	全面	灰色茶色	182	127	97	580	火山礫凝灰岩	
2	井戸	59	丸礫		礫面頂部に敲打痕跡	完形	全面	褐色	104	46	42	370	砂岩	硬質砂岩ハンマー?
2	井戸	23	割礫	一面割礫	礫面に敲打痕跡	片部	全面	黒褐色	55	55	55	350	石英斑岩	ハンマー?
2	井戸	18	割礫	一面割礫	礫面に敲打痕跡	片部	全面	灰色	100	76	23	190	輝石安山岩	一部黒化
2	井戸	1	丸礫		礫面に敲打痕跡	完形	?	黒色	64	53	41	310	砂岩	細粒砂面
2	井戸	67	鉄滓	椀形	上面気泡立ち	完形	—	—	125	88	58	600	—	—
2	井戸	101	鉄滓	椀形		完形	—	—	97	72	18	230	—	—
2	井戸	113	鉄滓	椀形		完形	—	—	86	53	28	215	—	—
2	井戸	1	鉄滓			破片	—	—	24	20	8	6	—	—
2	井戸	94	鉄滓			破片	—	—	26	19	11	9	—	—
3	土坑	25	割礫	六面割礫		片部	?	灰白色	104	56	46	270	凝灰岩	
4	地下式坑	37	割礫	四面割礫		片部	全面	灰黒色	96	63	31	280	輝石安山岩	
4	地下式坑	1	鉄滓		銅滓混じり緑青?	破片	—	—	27	18	15	9	—	銅滓?

第3表① 中世陶磁器等遺物・総量一覧

輸入磁器総量一覧		小計	2	17.4			
遺構	産地	器種	型式	点数	重量(g)		
1	中国	白磁	椀	-	6.6		
1	龍泉	青磁	椀	A-1	10.8		
渥美産陶器総量一覧		小計	4	443.5			
1	渥美	甕	-	3	385.8		
2	渥美	甕	-	1	57.7		
常滑産陶器総量一覧		小計	53	8,641			
1	常滑	甕	-	18	1,112.9		
1	常滑	片口鉢I	5	18.5	1-5・7		
2	常滑	甕	6a型式	1	88.5	2-3・11	
2	常滑	甕	7型式	2	258.8	2-2・11	
2	常滑	甕	9型式	1	98.9	2-1・11	
2	常滑	甕	-	19	3,026.0	・13	
2	常滑	片口鉢I	2型式	1	70.6	・13	
2	常滑	片口鉢I	-	1	28.6	・13	
2	常滑	片口鉢II	8型式	1	80.8	2-4・11	
2	常滑	片口鉢II	9型式	1	276.5	2-5・11	
4	常滑	片口鉢II	-	2	3,356.3	-	
4	常滑	甕	-	3	90.2	2-6・11	
一括	常滑	甕	-	2	134.7	-	
瀬戸・美濃系陶器総量一覧		小計	5	296.2			
1	瀬戸・美濃	緑釉皿	後IV(新)	1	17.1	・10	
1	瀬戸・美濃	折縁深皿	後IⅢ	1	107.9	・10	
1	瀬戸・美濃	緑釉皿	後IV(新)	1	11.8	・10	
1	瀬戸・美濃	緑釉皿	後IV	1	16.9	・10	
2	瀬戸・美濃	平碗	後I I I	1	142.5	1-1・7	
土器総量一覧		小計	16	421.6			
1	在地	カワラケ	杯	僧寺III(XI期)	2	53.7	・10
1	在地	カワラケ	杯	-	5	45.6	・10
1	在地	カワラケ	中皿	僧寺III(XIII期)	1	7.6	・10
1	在地	カワラケ	中皿	-	1	23.2	・10
1	在地	カワラケ	小皿	僧寺III(X~XI期)	1	24.4	1-6・7
1	在地	カワラケ	小皿	僧寺III(XII期)	1	6.5	・10
1	在地	カワラケ	小皿	僧寺III(XIII期)	1	18.8	・10
1	非在地	白カワラケ	杯	僧寺III(XIII期)	1	5.8	・10
1	非在地	瓦器	茶釜	-	1	209.0	1-3・7
2	在地	カワラケ	中皿	僧寺III(XIII期)	1	22.9	・10
2	非在地	白カワラケ	小皿	僧寺III(XIII期)	1	4.1	・10
		点数・重量合計	80	9,820.0			

第3表② 須恵器総量一覧

遺構	産地	器種	型式	点数	重量(g)	備考
1	永田	計		1	33.6	
		高台付杯	I I I I	1	33.6	
2号:2	新治	計		1	349.1	
		甕		1	349.1	
2	武蔵	計		1	104.9	
		甕		1	104.9	
1	湖西	計		1	33.4	
		甕		1	33.4	
1号:2 一括:1	猿投	計		3	212.4	
		甕		3	212.4	鉄釉系
2	東海	計		1	19.5	
		甕		1	19.5	
2	東海系	計		3	561.3	
		瓶類		1	224.2	
1	東海系	壺	壺Gか	1	25.1	1-23
		甕	古墳時代	1	312	
1号:2 一括:1	不明	計		3	98	
		甕		3	98	
総計				14	1,412.2	

第3表③ 灰釉陶器総量一覧

遺構	産地	器種	型式	点数	重量(g)	備考
2	猿投	瓶類	計	7	477.7	
			原始	2	143.5	1点転用破
1号:1 2号:1	猿投	瓶類	K14~90	2	216.6	うち1点(68.4g)は平瓶
1号:2 一括:1			9C~	3	117.6	
1	猿投	椀・皿類	計	2	21.8	
			K90	1	15.2	
2	猿投	椀・皿類	O53	1	6.6	
総計				9	499.5	







郡本遺跡群現況 (市原市 GIS より 2009 年 1 月)





市原市北部空中写真 (S22年頃)





郡本遺跡群周辺空中写真(536年頃)





上段  
1・3号・4号全体写真  
北から南方向  
(上右端市役所)



中下段  
1・3号・4号全体写真  
東から西方向  
(中段合成張り合せ写真)





1



2

3・4号遺構写真

1.1号全体中右端 上3号下4号

2.3・4号遺構確認面

3.3・4号遺構確認面上土層

4.4号縦坑

5.4号縦坑土層断面

6.4号掘り上がり上面から

7.調査風景



3



4



5



6



7





8

- 2号遺構写真
- 8.1号から2号遺構 南から北方向
- 9.2号遺構検出面
- 10.2号上部土層断面
- 11.2号上部掘り上がり
- 12.2号上部掘り上がり底面
- 13.2号下部土層断面
- 14.2号調査風景



9



10



11



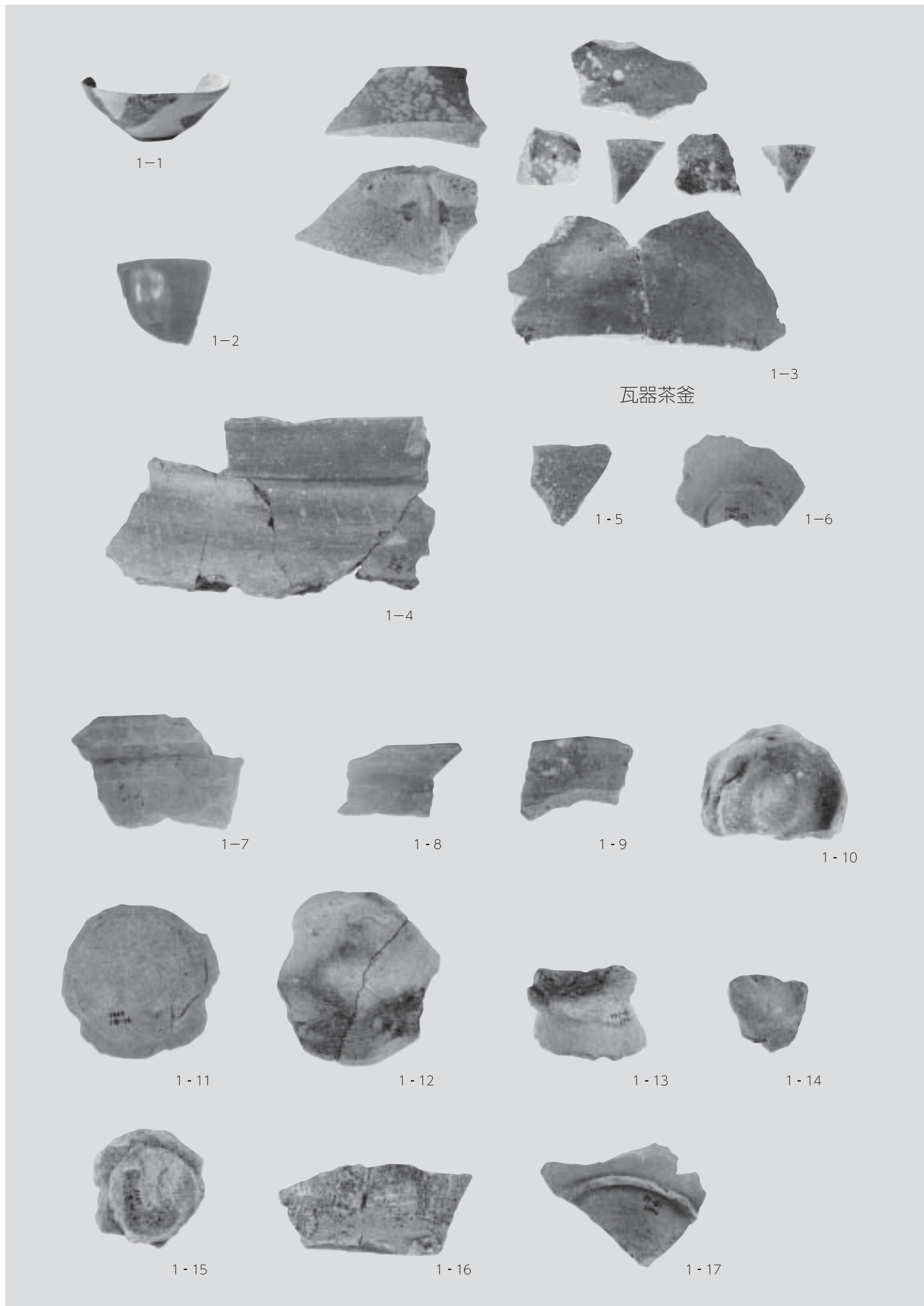
12



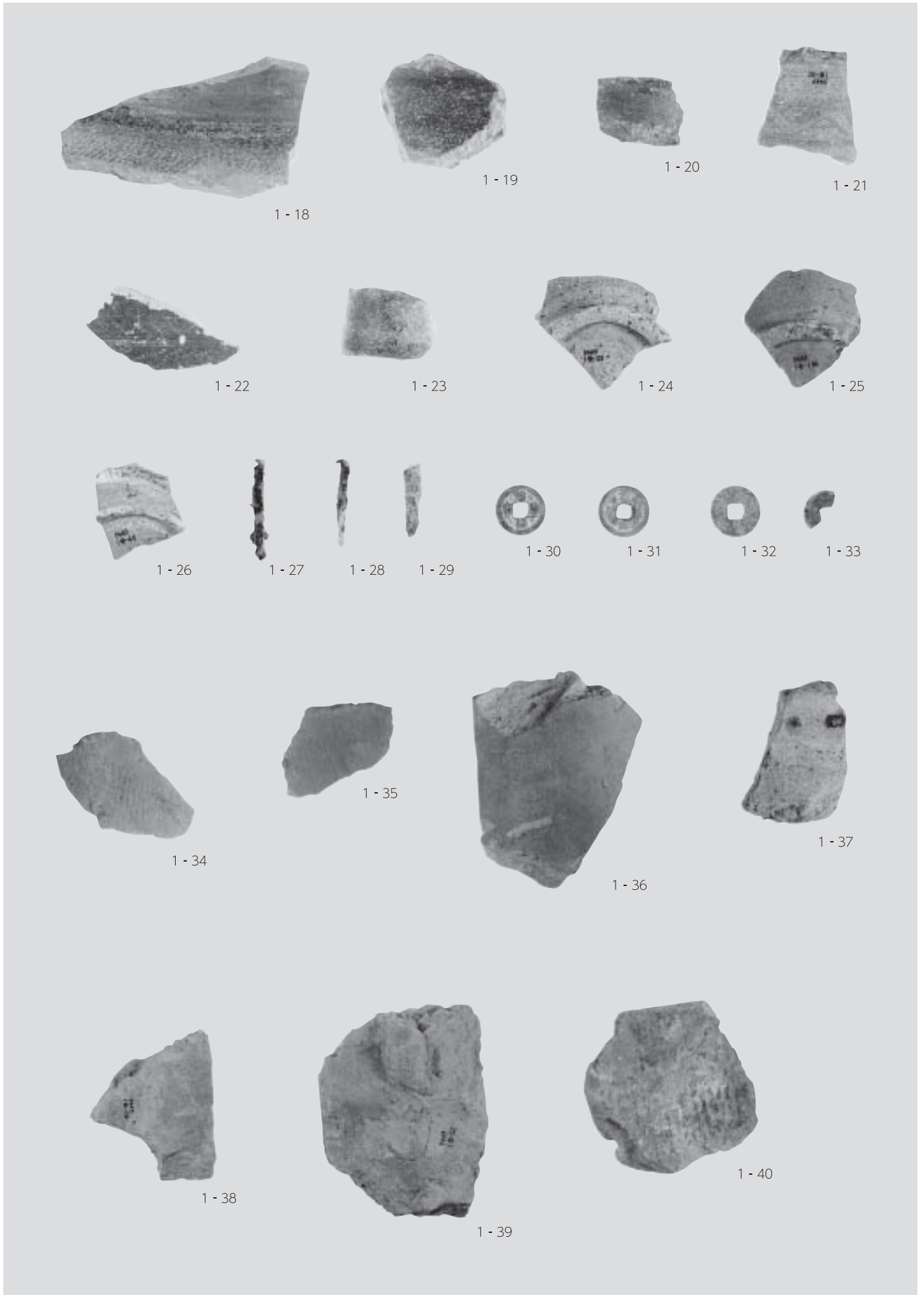
13



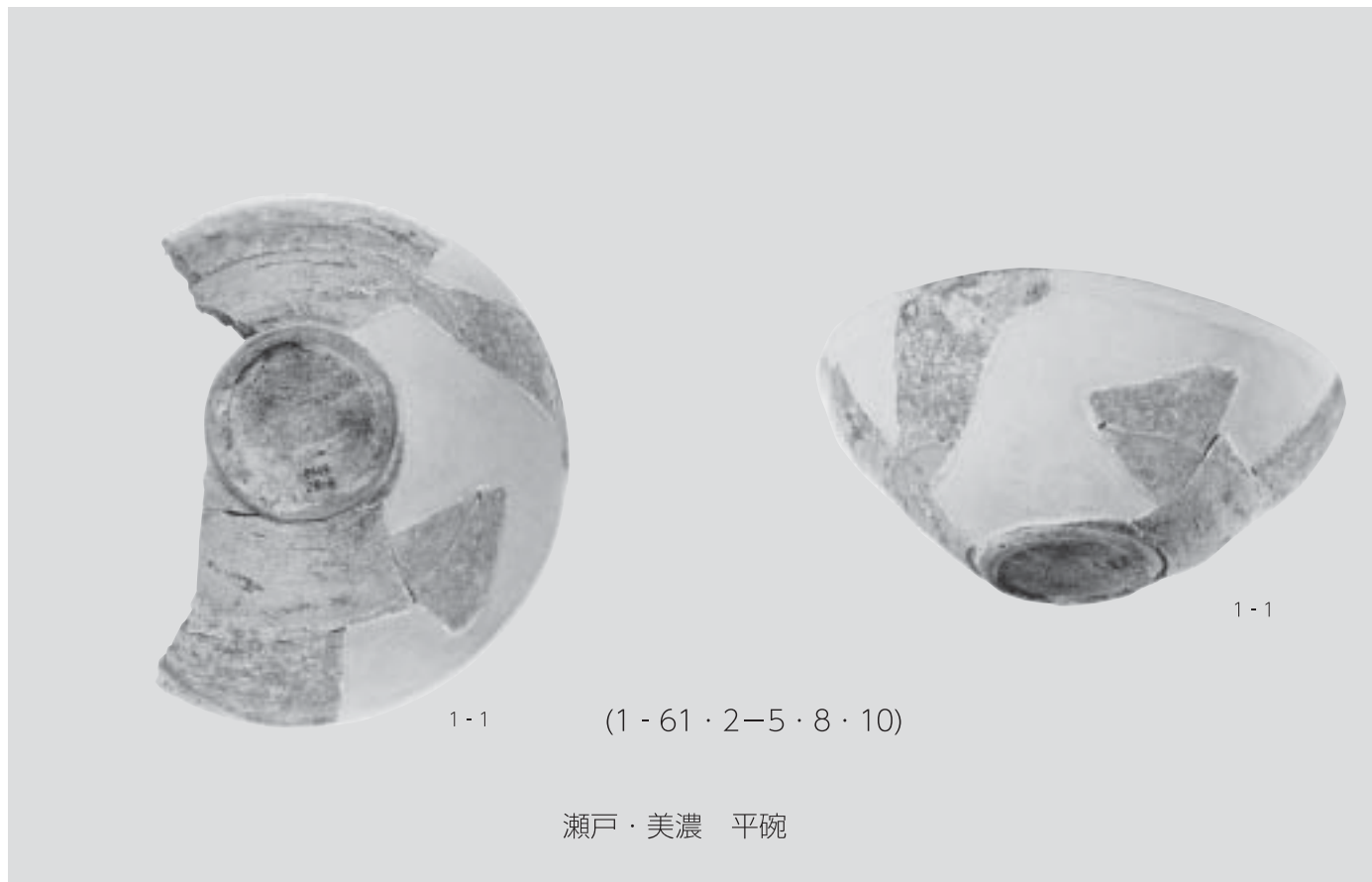
14



1号出土遺物(1)



1号出土遺物(2)



1-1

(1 - 61 · 2-5 · 8 · 10)

1-1

瀬戸・美濃 平碗



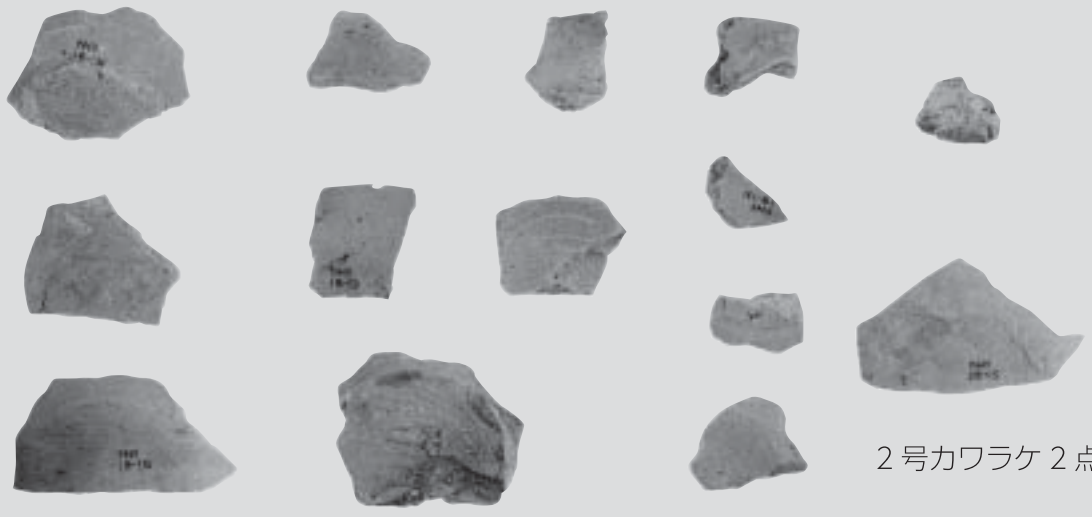
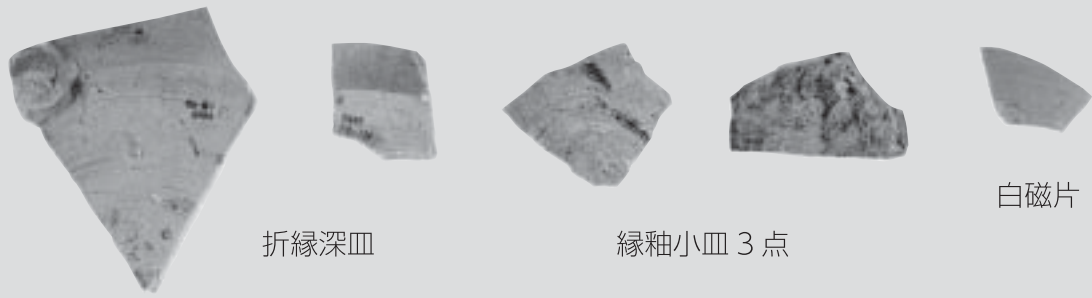
1号出土常滑産陶器

上3点 1号出土 渥美産甕

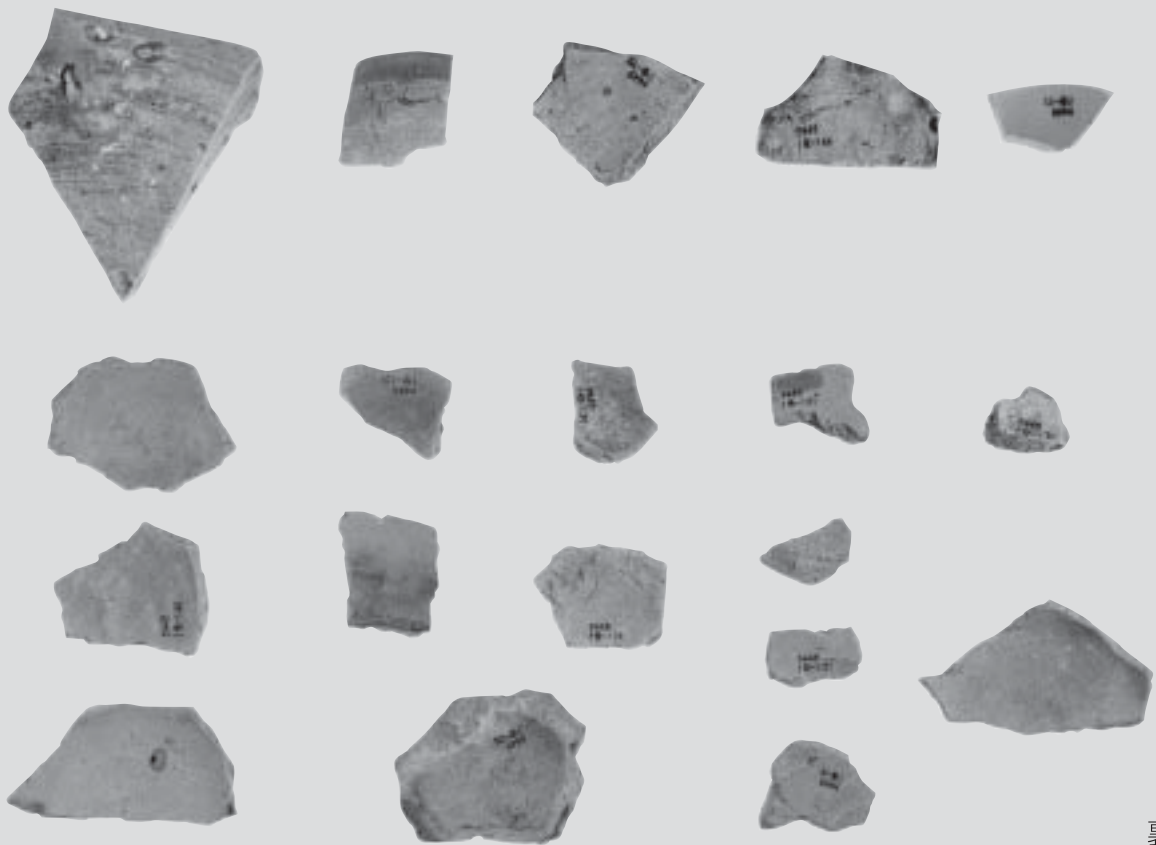
下1点 2号出土渥美産甕

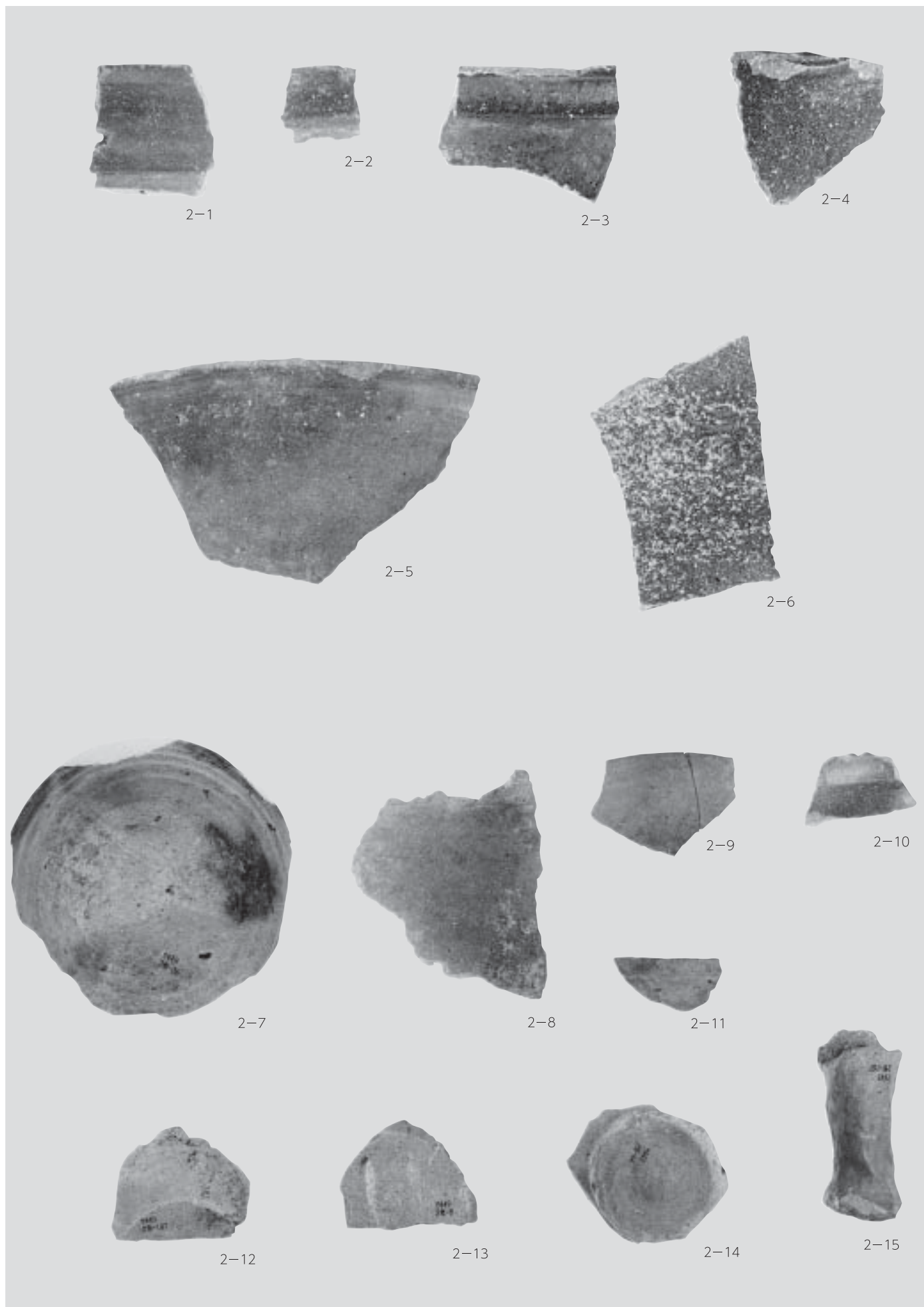
1号出土遺物(3)



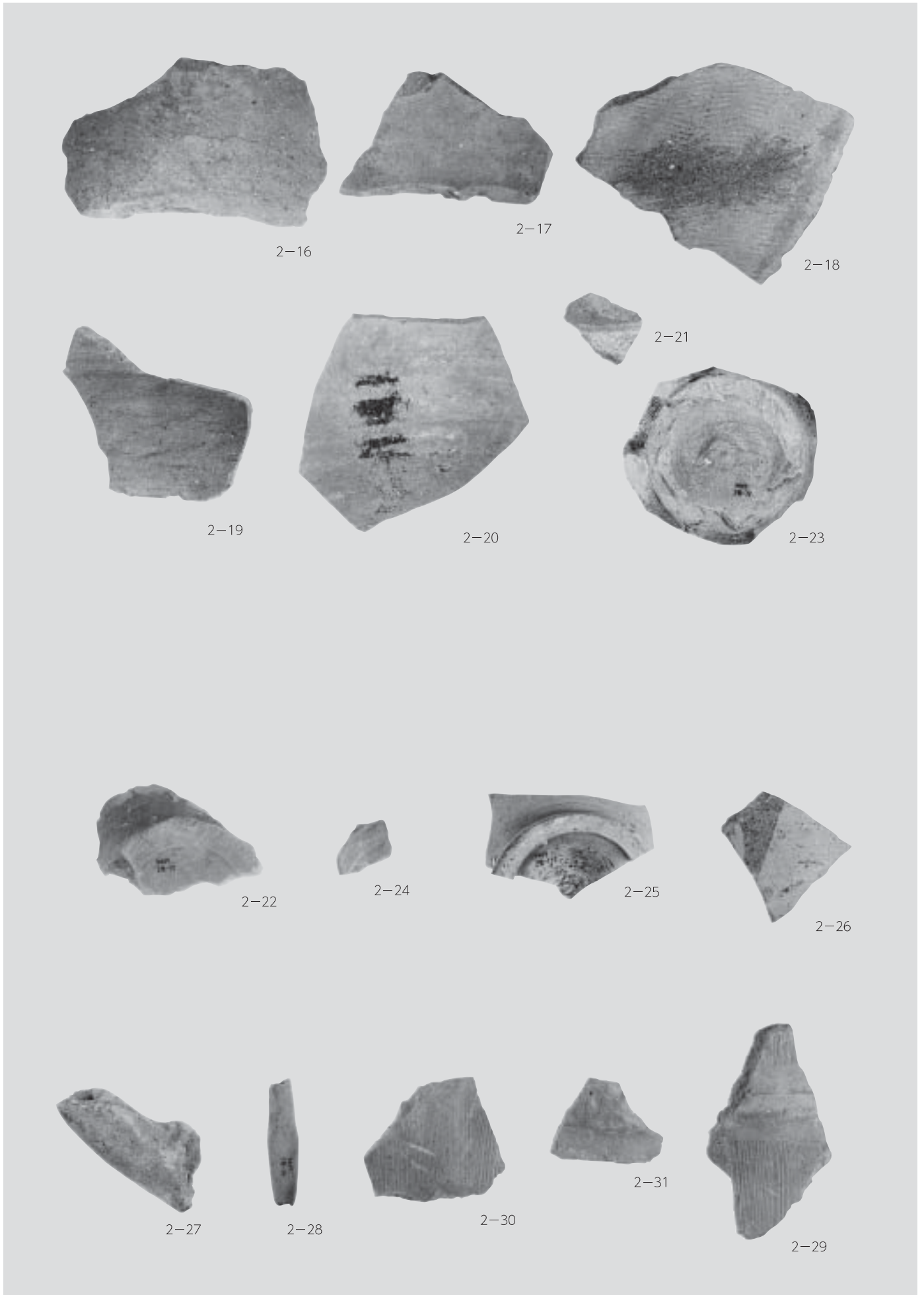


表

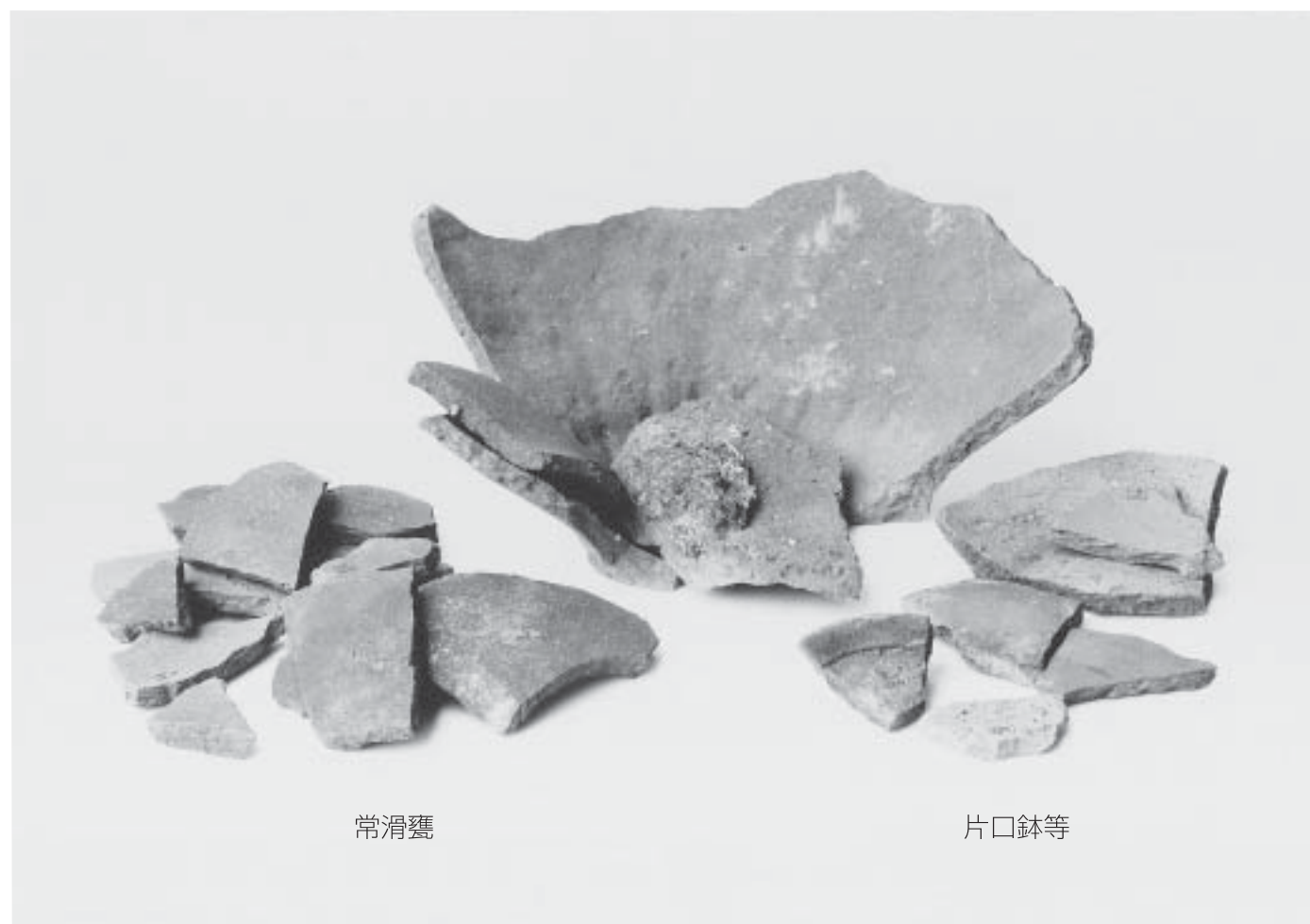
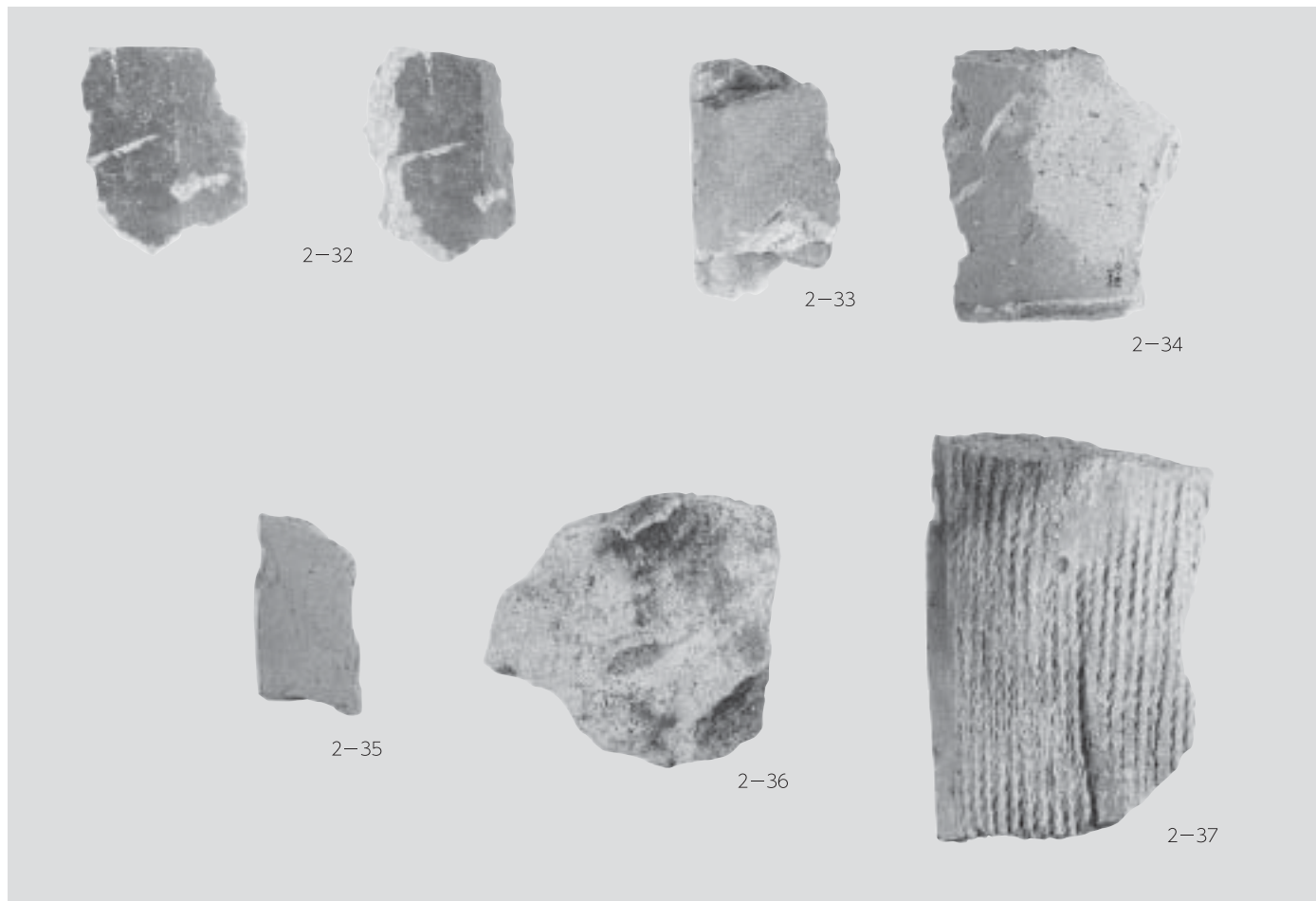




2号出土遺物(1)



2号出土遺物(2)



2号出土遺物(3)



# 報告書抄録

ふりがな	いちはらしこおりもといせきぐん (だいじゅうにじちようさ)							
書名	市原市郡本遺跡群第12次調査							
副書名	郡本遺跡群 (第12次)							
巻次								
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	近藤 敏・桜井敦史							
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436(41)9000							
発行年月日	2010年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
こおりもといせきぐん 郡本遺跡群 (第12次)	いちはらしこおりも 市原市郡本2丁目 389・396番	12219	セ449	35° 30' 47"	140° 07' 32"	20090511 ～ 20090529	153m <sup>2</sup> 本調査	集合住宅建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
郡本遺跡群 (第12次)	包蔵地	平安・中世	台地整形墓地1ヵ所、 土坑1基、地下式坑 1基、井戸跡1基、 溝跡1条、	土師器、須恵器、灰釉陶 器、瓦、中世陶器、銭貨	中世に大規模に台地整形 を行い、古代以前の遺構 遺物を湮滅している。			
要約	郡本遺跡群の前調査では、これまで調査例が少なかった中世遺構の本調査を実施した。市内遺跡確認調査11次調査における大規模な台地整形跡が、中世後半時期台地緩斜面整形の方形区画墓地であることが判明した。一方上総国府推定地として、古代時期の遺構が全く検出されず、廃絶した井戸遺構に大量の中世遺物と共に奈良平安時代の須恵器、土師器、布目瓦と、円筒埴輪が廃棄されている。これらの古代以前遺物は、鉄器による損傷が激しく、鋤鉞等で打ち砕かれて廃棄されたものと推測される。中世の段階で台地整形である土木工事がなされて、古代遺構遺物とも湮滅したと考えられる。古代の国府推定地とともに、中世の国衙推定地としてこの地域の重要性を示唆する事例となった。							

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第14集  
**市原市郡本遺跡群 (第12次調査)**

平成22年3月8日印刷

平成22年3月26日発行

編集 市原市埋蔵文化財調査センター

発行 小倉好武  
市原市教育委員会  
〒290-8501

千葉県市原市国分寺台中央1丁目1番地1  
TEL 0436-22-1111 (大代表)

印刷 三陽工業株式会社  
〒290-0056 千葉県市原市五井5510-1  
TEL 0436-22-4348